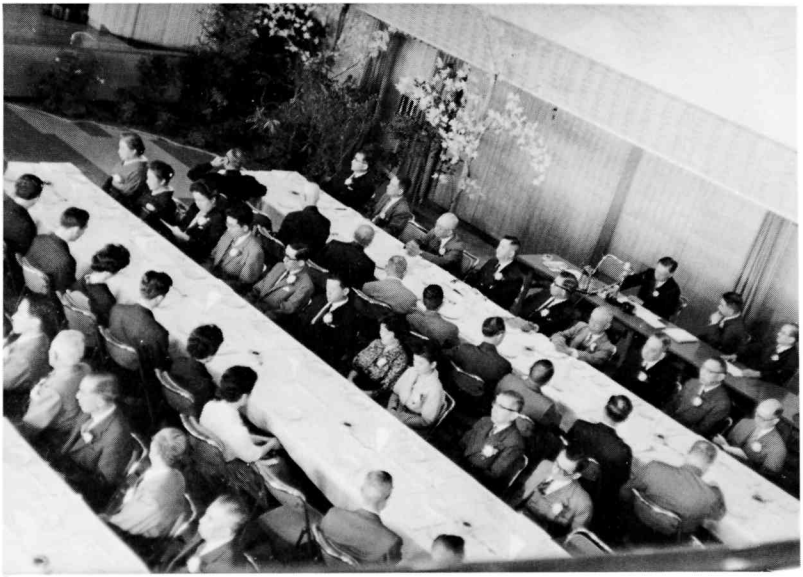
大川先生生誕百年祭記念誌

桜塘先生御遺影

祝辞を述べる高島菊次郎先生

挨拶する大川名誉会長

百年祭会場正面（会長挨拶）



御来賓の皆さま方

余　　興

大川先生御一家

大川先生 生誕百年祭（昭和卅四年十月廿四日）

挨拶

会長　池田新一

主催者側を代表いたしまして一言御挨拶を述べさせていただきます。この度私共誠に微力ではございましたが、本日の大川先生の御生誕百年の期日を目前にいたしまして、なにか御恩返えしの一端をと色々計画しておりました処、幸い先輩各位の激励を頂きまして百年祭を開催することに相成りまして、大変無躾ではございましたが、皆様方に御案内を差上げましたところ、本日は非常に御多忙のところを斯くも盛大に御出席下さいまして誠に感謝にたえない次第でございます。殊に高島先生を初めとして大変御高齢の先生方には、季節柄おいといもなく御光臨下さいまして、この催に錦上花を添へていただきましたことは、全く感激の外ございません。尚本日は大川翁と由縁の深い会社関係その他皆々様から、思いもよらない物心両面の御厚志をいただきまして、主催者側一同感涙にむせんでおる次第でございます。失礼とは存じますが、この席を拝借いたしまして厚く御礼を申上げます。本日は数日前の厳しい寒さと打つて変つた小春日和に恵まれまして、御高齢の方々をお招きいたしました私共一同一安心いたしたやうな次第でございます。このように万事好都合にまいりましたのも、偏に大川先生の御遺徳と皆様方の御芳志の昇華であると深く感激しておる次第でございます。

百年祭と申しますと、先般松本真平先生にお目にかかりました時に、随分いろいろな招待があるけれども、百年祭の招待というのは、初めてだと申すようなお声を頂戴したような訳で、大変珍らしいことのようでございますが、御承知のやうに古くは釈尊の花祭またイエスキリストのXマスなど、二千五百年又二千年来ずつと営まれて参つておりますが、何れもこれら聖者の御生誕を記念しております。よく考へて見ますと、どうも人間というものは矢張り、入滅された悲しい想出よりも、矢張りこの世に生れた偉大な御人格や御遺業を思慕してその人を死滅させたくない、又生れたならば永久に滅することなく存在するも、肉体の死は一種の衣更えであつて、人格の存在は永劫に後人と共に在つて活躍しておられるものと信じたいようでございます。こういう願いや思慕の情も、実は人間の本当の叡智が開かれれば、真実のこととして充たされると、先聖は教えておるようであります。又哲学的にも一度現われたものは決して無くならないし、無いものは決して出ないという偉大な因果の真理も示されております。そして人格の実在は人間の大いなる願いであるばかりでな

く、厳然たる道理の上に乗せられた見えざる事実のようであります。こういつた人間性の現れが地上に於けるお祭りとなり、人類の間に今日迄永い間続いて参つた元であつたろうと思うので御座います。たまたま新聞でアメリカのベルグソン、殊に戦後日本の教育にゆかりの深い哲学、社会学、教育学の大家であつたジョン・デューイという人も、生誕百年で今各方面で盛大な百年祭が催されて居る様に拝見致しました。而もデューイは十月二十日といいますから、大川先生とは五日位の違いであつたようです。こういう意味に於て、私達は此処に、永遠に消えざる大川先生の生命、御人格をここにお迎え致しまして之れを寿き、又地上に於てなされた偉大な御遺徳に対して感謝申上げ、更に私共後の者に一層の御力添えをお願いするとこういう意味で、このお祭りを考えたいと思うので御座います。

本日の催しも、先生の御遺徳は極めて大きく、私共の力は洵に微々たるものでございますので、主催者ということは恐れ多いことで幾度か御辞退申上げたので御座いますが、御家族の大川鉄雄様から、お前達の実力に於てやれ、派手なことはするなと云う様な激励や御注意を頂きましたような訳で、どうしたらいいかと同志一同随分迷いました。尤も派手にやれと云われても力が無いのでございますから、その方は心配はないのですが、天下の大川先生のメンツに拘るようなことも出来ない、そこで一同意を決し、先生の御遺徳を思う一念に徹しよう、恐らくや大川先生も御庇護、御助力下さるであろうと、こういう確信のもとに発足したような訳で御座います。果せる哉本日は、かかる晴天に恵れ斯くも盛大な催しと相成りました。これは決して私達主催者側の力では御座いません。此処に居られます大川先生が直接、皆様方の心々へお伝え下さいまして、今日此処に皆さんをお招きして下さつたと斯う考えるより外に、今日のこの盛会の理由が分らないので御座います。

簡単に百年と申しますけれども、ひるがえつて、この大川先生の御一生の百年を省みますと、実に世界史の上に見ても日本歴史の上に於ても、全く一大波乱の時であり、或る意味では大革新の時代であつたと思います。歴史の教える如く、偉大なる人の生れる時は、非常に色々と問題の多い時代であります。浪花節の文句のようでございますが、昔から「国乱れて忠臣出で、家貧にして孝子出づ」と云われております。又こうした偉大な人物を見る場合は、必ず歴史的背景と合せて観察すべきであるといわれております。大川先生のお生れになつた時の日本は、丁度安政六年、一八五九年でありまして、御承知の通り、この年は安政の大獄があり、彼の吉田松陰がこの東京の近くの小塚原に於て刑場の露と消えた時であります。当時国内では勤王佐幕の内憂、対外的には世界の五ヵ国から日本の開港を迫られ、開国か鎖国かの外患があり、文字通り波乱万丈の国情でありました。同胞相喰む一大犠牲

の後に始めて開港通商を開いた時であつたのであります。これから維新の大業がなり、そして後進国日本が世界の一員として国際場裡に参加したのであります。三百年の夢から醒めて、広汎にして多彩な世界文化に触れた日本の驚きはどんなであつたでしようか。日本の指導層は国防のためにも又国際的品位のためにも、三百年の遅れを取り戻さねばならない。兎にも角にもと、歌米文化の吸収に力めた訳でしよう。そこで今日の所謂近代国家が出来上つた次第であります。こういう中に、日清、日露又第一次世界大戦があり、何れも大勝を博したという朗らかな時代もあつた訳でありますが、第一次大戦後世界の様相は変つて来ました。一九三〇年、昭和五年の当時で、ついにこの潮流は大爆布となつて落下しました。世界を挙げての大恐慌が起り、我が国にもその影響が押し寄せてまいりました。その対策の一つが金解禁であつたのでありますが、それが却つて日本経済の混乱を激成しまして、ついに神武以来の大恐慌となりました。こういう経済的不安の中から政治的不安へ、私達が今思い出しても誠に戦慄を覚えるような血腥い事件が累起してまいり、遂に軍政時代、戦時体制へと押し流され、日本は再び鎖国状態に入つてしまつた。そして世界第二次戦争に突入する運命となつたので御座います。而も日本始まつて以来未だ曾てない敗戦というさんたんたる国土と汚名を残すのみとなつたのでございます。

こうした激変極りない日本歴史の中に於て、大川先生が、いかばかりか日本の将来を思い日本の産業の開拓発展に奮闘せられたか、殊に貴族院議員として七十年の経験を傾け敢然と金解禁尚早論、保護貿易必要論を高唱されて憂国の警鐘を強打されたことは、予言の的中と共にその人格識見のなみなみならぬこと、今更ながら襟を正さざるを得ないものがあります。この度の敗戦日本の悲運を、楽屋の内よりみそなはしておられる先生の御感懐は果して如何でありませうか。終戦後十五年幾多の苦難を乗り越えて、兎にも角にも新日本、民主日本として再生いたしました。今日伺いますと云うと、我が日本の経済的復興は世界の驚異であるといはれております。これは勿論日本人のもつ偉大にして賢明な努力の賜でありましよう。しかし祖国更生の真の底力は、矢張り祖先先輩の陰徳の然らしめるものであろうと思うのでありまして、御同慶でありますと共に感謝を忘れてはならないと存じます。殊に一九三〇年の恐慌を契機として世界は既に思想的にも文化の面でも一大方向転換（革命）を成し遂げつつあります。この劃期的な時期に日本は世界の状勢と隔絶して全く盲目であつたのであります。殊に後刻石川先生がお話下さることと思いますが、世界に於ける科学の驚異的な進歩があり、これらが互に因となり果となつて、今や世界の人間界は色々と相剋、摩擦を生み、国際間の緊張も益々その度を加えてまいりました。所謂冷戦と云われ、人類の破局が喧伝されておる現状であります。最近の紙上によれば、いよいよ米ソ二大陣営

の両巨頭が歴史的会見をするということであります。これも一面は人類が死活の最後の関頭に立つて二者択一を迫られている証左であり、又他面同じ地球の上に生を営む人類は、ここで一番利巧になつて地球人として目覚め、協力しなければならないという、自らの運命を決すべき大きな智性を要求されている証拠であります。そして一方には「夜明前は一番暗いもの」人類の最後の暗黒に今や夜明が忍びやかに訪れて来ている、いはく宗教的黎明期であり、人間革命の時であるという声も世界的に聞えて来ている訳でございます。こういう実に明暗極端な誠にむづかしい時代であります。この中に漂う日本の行手を思います時、徒らに外装の復興や外国の称讃に目を奪われてはならないと存じます。益々祖先先輩の陰徳を反省する必要があると思うのでございます。大川先生が当時私達に教えられたことを想い出します。俺の頭の中は単なる専門家の知識じやない、俺は人間に必要な学問を全部合理的統一的にやつたのだ。お前達は一番最初物理学をやれ、そして物の性質を知れ、その次ぎに物と人間の関係である経済学をやれ、併し経済学の元は欲望であるが、欲望は何ういうもので、何処から来るのかを知らなければいけない。之れを徹底するには哲学をやらねばならない。哲学は理論であつて真理を求めるものだが、併し単に原理や真理を知つた丈けでは、人間は生きられない。此処に宗教、神の存在というものを知らなければいかん、そしてそれに対する信仰心というものがなければいかん、俺は西洋の学問は凡て身につけたつもりだが、それでもどうしても、宇宙には人間の力の及ばないオールマイティが居ると確信せざるを得ない、と申されたことを今でも覚えております。こういうように学問を綜合的統一的に身につけられ、而も実践の上に移されながら、私達をお導き下さつたのであります。又先生は、世間では大川を算盤だけはじく人間だと云うが、俺は心の中で先づ山に登つて、この事業は国のためになるかどうかを考へる。それから山を下つて、国のためにはなつても、民間でやるには算盤に合わなければいけない、合わないものは国が自分でやるより仕方がないがと考えて見るのだ、といわれました。正にバランスのとれた人格者であられた。而もあの富士山頂から洋々たる太平洋を眺めるような人格者が、更に太平洋の海底まではいつて多趣多芸、趣味芸能の分野に迄名人振りを発揮せられて、世俗の中に在られたことは、大川先生の御人格がいかにふくよかなものであつたか、今日なにかしら私達に、大きな示唆をお与え下つているように思はれます。これからの日本の建設に於ても亦世界の平和建設に於ても、本当の日本人、良き日本国として世界人類に奉仕と申しますか、一つの役目を果たす上に於て矢張り、大川先生のような御人格を一つのモデルとして、国民全体が強く正しく賢く朗かにならなければならないのじやないかと、こういう風に存ずる次第であります。

本日ここに大川先生御生誕百年祭を開催いたしました処、誠に盛大に各位の御光臨を頂きました。今日この催しに於て大川先生の御人格が皆様のお心の中に再生せられ、どのように演出されますか、それは本日御光来賜りました皆様方、殊に先輩各位の語り唄い又踊つて戴く名演技と相まつて、かならずや余す所無く表現されるものと御期待申上げておる次第であります。それに引換えまして舞台その他万事不行届きであり、又後ほどの宴席も試に粗肴で御いますので甚だ恐縮しておる次第で座いますが、この点平にお許し願います。

最後に人類の寿命もやがて百二十年になるという話を伺います。百年祭も最早死後の祭ではなく、喜寿米寿と同様生前の而も珍らしいことではなく当然のお祝となりましよう。先輩各位殊に御高齢の諸先生方には益々この御確信をお持ち下さいまして、御自愛下さるようお祈りいたしますと同時に、こういう人間の寿命から考えますと、昔云われた四十、五十は鼻垂れ小僧ということが文字通りと相成つてまいりました。私共桜影会のメンバーは正に若僧ばかりで御座います。本日の御縁を機会に是非共、今後大川先生に代つて諸先輩方の御指導と御薫陶を戴き度いと願つておる次第で御います。

以上かかる席から色々とお願い申上げましたが、御指導を頂く前に甚だ僭越であると、先づ御小言を頂戴するのではないかと怖れるので御座いますが、実はこれは私一人の独断では御座いません。大川先生が皆様にそう頼めと、今私の耳元で指図して下つたので御座います。私事を申上げて恐縮で御座いますが、二十年来大川先生の写真を仏前に奉安して、毎朝お祈りを捧げることが私の日課で御座います。今朝は新に、本日の催しについて恙なきよう詳細に御指図を願つたような訳で御座います。どうぞ先生のお顔に免じておゆるしを願いたいと存じます。

以上大変長ごう御座いましたが、どうぞこの一と時を盛大に意義深く又先生の人柄を余す処なくクローズアップして戴くことを御願申上げまして、甚だ蕪辞では御座いますが、御挨拶にかえさせて戴きます。有難う御座いました。

藤原銀次郎先生祝辞

掲載順序は御祝詞をいただいた順になっておりますことを御諒承下さい。

大川平三郎翁の生誕百年祭にあたり、私までお招待を賜りましたが、何分高齢のため出席出来ませぬことを残念に思ひ、かつは深くおわび申し上げます。

翁は我国製紙業界の大先覚者であり、大恩人であつて、その育成発展に貢献された御功績は周知の事実であります。また更に広く財界各方面にも御活躍なされ、あらゆる意味に於て、私共の大先輩でありました。不肖私も大川翁には、お教えを蒙つたことがいろいろと多く、又そのお援けを乞うたこともありまして、一方ならずその厚誼に感じております。

翁の遺された御偉業は、今日に於ても各方面に華々しく光輝を放ちつつありますが、私の特に敬意を払つておりますものは、夙に意を教育事業にそそがれ、財団法人大川育英会を創立せられましたことで、それによつて既に四百余名の幾多の英才が世に送り出され、今日各方面の第一線に活躍しつつありと聞きますのは、同じく意を教育事業に致すものの一人として、洵に御同慶に耐えぬ次第であります。

是れに依つて此れを観るに、翁はひとり財界の大偉人であつたというばかりでなく、国家百年のため深く次代の薫陶に意を垂れられたことは実に育英事業界の大偉人とも申すべく、今日その遺愛の門下生の方々が中心となり、その生誕百年祭を盛大に取り行わせられますことは、故翁霊あり、さぞかし在天に最大の喜びを感じておられるものと確信いたします。

些か蕪辞を述べてお祝いの言葉と致します。

昭和三十四年十月二十四日

高島菊次郎先生祝辞

この夏王友クラブで成田君と話の末に、成田君から、大川さん恩顧の方々が現在四百名以上五百名になんなんとしており、その大川さんの会を復活したいと思つているけれども、多少躊躇しているが何う思うかと、こういう話がありましたので、私は誠に結構なことではないか、何を躊躇しているかと申して置きました。

敗戦後兎角人権尊重というような名に隠れて、恩を恩とも思わないような世の中になつている際に、故人の徳を偲ぶ会を開くということは、誠に結構なことであります。今日社会的に欠けていると思いますことは、感謝の念である。それを表わすのであるから、どうぞおやんなさつたらどうかと、若し私も出て良ければ伺いましようと、こういう話をして居つたんで御座います。その後私は旅行を思い立つており、実は今日旅行に出発する積りでありましたところが、二、三日前に桜影会の池田会長と伊藤君が参りまして、この旅行を延ばすか、さもなかつたら何か書いたものを出して貰い度いと、こう云うことでありました。咄嗟の間に、どうも華々しく美辞麗句を並べてみたところが、充分自分の意志を発表した訳にもなりませず、さりとていろんなものを書いて、書いたものので間違つたことを残しては申訳のないことになります。幸い日を延ばすことが出来ましたので、本日末席を汚すことに致しました次第で御座います。

私は唯今、池田会長が熱烈なる心情を吐露して、故人の遺徳と、故人の人格とを賛美する御言葉を伺いまして、誠に感激しておるので御座います。先き程藤原氏の祝辞にありました通り、大川氏は明治、大正時代に於ける産業界の大立物で大恩人でありますが、殊に此製紙事業については非常な御功績を樹てられ、今日の繁栄の基礎を作られたもので、もうそれ以上私共製紙業に従事した者からは改めてお話する必要もない位であります。私はこの日本の洋紙製造事業を、今日からつらつら考えて見ますると、これを第一期、第二期、第三期とこの三つに分けて形勢の推移を見るのも面白いと思い、そう考えておりました。第一期は日本洋紙製造事業の創業の時代であり、第二期は王子製紙が当時の王子の専務鈴木梅四郎氏が敢然として米国から新らしい設備を輸入して北海道苫小牧に工場を建てた。これが第二期の始まりで敗戦迄を第二期として、敗戦後華々しく各方面の発展をいたしましたのが第三期と、こういうように私は考えております。

創業時代にはあちこちに色々人物が出ました。古いところでは広島の浅野家、阿波の蜂須賀家等が、外国の文物を見られて、有恒社を興こすとか千寿製紙を興こすと云う様なことがありましたが、結局創業時代を大成して下さつたのは大川氏であります。殊に王子製紙は夫れによつて発展して参つたのでありまするから、私共から申しますと、大川氏は殊に大恩人であります。

大川氏は製紙事業のみならず、各方面に御活躍なさつて、殊に浅野総一郎氏の仕事に協力された。これは大川さんが王子の工場で働いておられる時に、浅野氏が石炭の供給をしておつたそういう関係から、ずつと懇意になつて、何んでも二十代で洋行なされる時、横浜でお見送りしたのは、浅野氏一人であつたとか云うような話を聞いております。又仕事に対する先見の明、決断力、実行力というようなものが、お二人とも似よつたところがあつて、非常な深いお友達になつたのではないかと思はれます。浅野セメントに協力なさり、其後東洋汽船だの浅野鋼管等にも御協力なさつたと云うようなことで、又其の後、今日この会場に当てられております埼玉銀行にも参加される等、各方面に力を尽されました。大川さんより先きに逝かれた方を別としまするとと、私共が記憶している中では、事業の種類は違いまするが、凡そ同時代で性格や仕事の範囲その他で根津氏とよく似た処があり匹敵した大立物であつたのじやないかと斯う思いまする。そういうような大人物であり且つ又た事業は多方面であつたのみならず、非常に複雑な御性格であつたように思われますので、私共日常を余り存じません者が、大川氏を此処で評しますのは適当でないけれども、自分の見聞したことを一応申上げる次第ですが、間違いがあつたら皆さんに直して戴き度いと思います。

大川氏は改めて私が申上げませんでも、日本に於ける自助伝中の御一人であると思います。渋沢翁のお引立ても無論これは見逃すことは出来んかも知れませんが、兎に角大川氏と若い頃一緒に働らいておりました山際杢助君が、私と同じく苫小牧の工場で働らいておりました頃、この人が時折り茶話に、大川さんのことを話しておりました。山際君は、今の日銀総裁の叔父さんになりますが、どういう関係からか渋沢翁に御厄介になつて、渋沢家の玄関番から王子の工場に通ようになつたと云うことで御座いました。その当時、大川氏も渋沢家から王子の工場に一緒に通つておられました。まあ今で申しますと、大川氏は別に正式な学問をなさつた風にも見えませんが先き程非常に哲学的宗教的のお話が池田君からありましたが、露骨に申上げますと、殆んど一職工として、耳からの学問でなく、眼と手の学問で独自で自分を作り上げていつたものだと思はれます。

大川さんが洋行なさつた頃は、アメリカでも未だ機械設備の進んで居ない頃で、グラインダーなど動力など要するもの

は水車直結でありました。山の中で原料の多い地点で、水力のあるところに水車直結でやつておつたという時代であつたと思います。大川氏が洋行中実習したところを其儘コピーしたものと思われますが、天龍川の川傍の中部で水車直結の工場をお作りになつて居つたので御座います。新らしいことを始めれば、どうも何時でも夫れに従事する者の技術が伴なわないので、旨く行かないのです。中部も創立以来少しも儲からんで、結局大川さんが責任を負つて身を引かれた。これを世間では、三井銀行が藤山雷太氏を送つて専務にして、大川氏御兄弟を追い出したという風に申しますけれども、実際は大川氏が責任を負われて出られたものと思ひます。

大川氏は其後御承知の通り九州の坂本工場を御経営なさいました。話が長くなりますが、これはまあ色々古い因縁話ですが、坂本というところはその山奥に材料が豊富で樅、栂などが多かつたところで、元熊本県人で藤村四郎という方が此の坂本工場を創立せられた。藤村氏は何処か東北の知事をなさつておられた方で、技師長は安場安喜氏という方でこの方は九州鎮台といわれて永い間福岡県知事を務め、後北海道長官となつた安場保和さんの嗣子で今山陽パルプの安場君のお父様です。そこえ藤村氏が知事の時に警察関係をやつておつた人を、—これは相馬君の養父なんですが、—引つぱつて来て、今で云えば工場管理に当らせたんだと思います。ところがどうもそういう役人上りの仕事で旨くいかん。それからこの工場の機械は、その後大川氏の四大王として活躍した長谷川太郎吉君が、当時横浜の商館に出入りしておつてその機械購入の取次をしたもののようでしたが、この長谷川君が又仲に立つて、坂本の工場を大川氏御兄弟に譲るように世話したので、後に長谷川君が大川さん傘下の有数な方になられたと、こういうような因縁であります。

それから大川氏が其後、木曾の工場をお作りになりました。中津川と須原ですが。私がずつと前に、三社合併直後でしたか中津川に参りました時に、旧い宿屋がありまして、そこの主人が旧いことを話しておりました。渋沢翁が昔、長野県から木曾へ人力車で出られたことがあつたそうですが、それを途に擁して土地の人々が、材料が多いから此処で一つ製紙事業をやつて貰いたいと云う運動をしたそうで、それを大川さんが引受けてあそこに工場を創めたと、こういうことのように其時に伺つております。それから芝川工場、これは四日市の人が作つておつたものが芝川に移転して来たのですが、四日市製紙と称して、是れが矢張り大川傘下の別動隊で大川製紙コンツエルンに入つて居つたのです。其後王子が当時の長官に頼まれて樺太開発のために、大泊に小さなパルプ工場を作りましたが。大川さんも又遠い将来のことをお考えになつて此処に基地を作ることを思ひ立たれ、泊居に工場を建て次に真岡に作り最後に恵須取に作られたのでありますが、そういう風に発展なさつて結局樺太工業となつたのであ

ります。ところが大川さんが樺太ばかりに金を掛けるので、長谷川君が九州である自分の方を無視されては困ると憤慨した結果か九州製紙の新工場として同君が主唱の下に八代工場を建て結局樺太工業と合同統一され大樺太工業会社が出現したのであります。

斯様にして大川氏は財閥に頼らないで自分で独力大事業を作り上げられた。其卓見なり努力なり財力なり、今で申します本当の実力者であつたことは実に見上げたものでありまして、到底常人の出来ないところであります。

更に大川氏が富士製紙の社長をも兼ねるようになりましたが、このいきさつについては御承知の方もありましようが中には大川氏が富士製紙を奪つたと云うような誤解を持つている方もあるかも知れません。それは全く誤解で其の辺のいきさつを少し申上げます。富士製紙は私が王子に入つた当時に原六郎氏が社長で其後に窪田四郎君が社長になりました。この方は私共と同じく元三井物産に居つた人で、内田信也君の兄さんです。原氏が社長時代に甲州出身の小野金六氏が専務この人の甥でしたか、其姻戚になる穴水要七君が入つて販売部長をやつておりました。そこえ窪田君が入つて来ました。同君は誠に明快な紳士で、まあどちらかと云えば商売人と云うよりは理想家肌の人でした。社長に就任するや何でも王子に負けてはいかんと云うので、私の方よりもう一段大きな網巾一八五インチという当時最大のマシンを江別工場に据えつけ、一方には水力発電を持たなければいかんと云うので、芝浦の岸氏に頼んで野花南といふ所に水力発電所を建設したりして積極的に発展策を講じて居りましたが、万事多少理想に捉らわれすぎたようで、これに対して穴水君は実地から叩き上げた実際家であり、又商人として有数な方でしたので、窪田君のやり口を嫌つて、大川氏に相談した結果大川氏が富士製紙を兼ねるようになつた次第であります。その当時広瀬君が技師長であつたが、同君は学校出ではありませんでしたが立派な人でした。穴水君としては自分の方には優秀な技術陣がないのでどうも物足りない、どうも王子に負けるようだからと考へ大川氏に入つて専ら技術を見て貰い、自分は営業方面を担当すると云うことで話がついて、大川氏御兄弟が関係され大川氏が社長で穴水君が専務でやることになつたんです。そういう訳で大川氏が富士を強引に強奪したのでも何んでもありません。それについて面白い話があります。その窪田君がさつぱりと後を譲つて、製紙会社の連中や各販売店の連中を日本橋の福井楼に招いて、引退の披露宴を催したことがありました。その時の挨拶が面白い。「世の中には後進に道を譲るということがあるけれども、今回は自分は先輩に道を譲るのだ」といつたので拍手が止まなかつた。窪田君は友人として誠に御気毒でもあつた。そういう風なことで大川氏は富士製紙をやることになつたのであり、大川氏は愈々樺工と富士の経営を兼ねられて製紙界に大成したのであります。

それからどうして三社が一緒になつたかと云うことであります。これは王子としては何もそんなことを考えていませんでしたが、穴水君の株は遺族の希望によつて、同君の遺書にもあつたそうで、王子が引受けることになつて王子は富士の一番の大株主になりました。それが為めに大川氏の懇望もあり、私の方から小笠原君を穴水君の後任として専務に送りこんだような次第でございますが、併し何もこれは合併しようとか何んとかと云う事は無かつたのであります。穴水君と私とは商売上所謂商売敵であるが、日常の交際は誠に懇意でした。その穴水君が代議士になつてから間も無くでしたが、曰くには、――高島どうだ、君は一生この仕事をやる積りだろうが、俺は年に二十万円も（その当時の金で）楽に使える金があれば、仕事は君達にやつて貰つて俺は政治をやりたいという。――それではお前一体政治をやつてどうする積りなのかと私が云うと――俺は政治をやつて大蔵大臣になる。今のような金融のやり方じや日本の産業は伸びない。それだから仕事は君等がやる、合併しないかと――いう話があり、私は、合併は容易に出来るものでないそれは君無理だよ、と云うような斯ういう話があつたのです。それから穴水君が亡くなりそんな話は消えておりましたが、結局問題が起つたのは次のような次第です。

穴水君は強気な人でしたから、富士製紙は紙が余れば自分でストックし販売店にも持たせる、結局景気は循環するのだということで、これは第一次大戦の時大当りでそれで非常に儲けたこともありますが、その様なことで穴水君は却々強気でした。然るに景気は容易に直らない。これが大川氏と穴水君と始終衝突するところで、大川氏としては穴水君に営業を委しておるんだけれども、そう下手なことをやられては困る、王子は何も持つていないじやないかと云うことで二人が時々論争をしましたようだが、穴水君は今申した通りどうせ景気は直るものだ循環するものだという信念であつたのだが一面には又樺工と製品のかち合ふ為でもあり、これを反駁して富士で造つてよく売れるような模造紙なんかを樺工でも真似をして造るからだ、これは貴方が富士の内輪のことを知つておるものだからだ。それだから紙が余るんだ、と云うようなことで、やつているうちに穴水君は亡くなる。加之第一次大戦後米国で新規に出来たオーシャンフォールの製紙会社が新聞用紙の投売に来たので富士も樺工も全くの赤字、苫小牧は僅かに黒字と云ふ悲酸な目に遭つた。所謂泣面に蜂で更に一九二九年の十二月の末、アメリカの農産物が暴落したのがキッカケで世界的不景気がやつて来た。大正六年が其どん底でした。

その間、大川さんの方では藤田君が金融を受持つていました、その金融がだんだん苦しくなつて来たので、藤田君が小笠原君の家と近いものだから、毎朝出掛けに訪ねては、おい何んとかしないかと動かし居つたのが、だんだん合併案の

煙が火を見るような型になつて来た訳であります。それではうちで一つ案を作ろうかと云うことになつて、私が合併案の株の比率なんかを、資産なり生産力なり収益力なりを綜合して作りました。其基礎になつた数字は、栖原君が極めて簡略に書いた材料があつたので、それと紙業雑誌などに公表された材料などを参考とした。これらを土台として三井合名会社に合併の有利なる事を説明しましたが、貧乏人が三軒集つたところで良くはならぬ、結局三井銀行が金融を負ひ込む様になるから、それは困ると、云ふことでとうとう沙汰止みになつたのであります。藤田君は大川氏から金融の遣り方が悪いと大分叱られた様ですが、藤田君としては兎に角金融に苦しいものだから、何んとか一緒になつた方がいいんだと一生懸命でした。そんなことであれこれやつている中に、焼け棒杭にまだ火が残つていたんでしよう。それを後に三井銀行の池田成彬氏が聞いて、若し合併して君等が予定せる年七歩の配当が確実に出来るということであるならば、銀行は金を貸すのが商売なんだから、確実なものに貸さんと云うことはない。どうだ俺が一骨折つてやろふではないか、その調書を一度俺れに見せろと云う話が藤原氏にあつた。その調書を見てこれなら心配は無いじやないかと云うんで結局池田氏が乗り出してくれることになりました。その当時結城豊太郎氏が興業銀行の頭取で、樺工の金融は主として同行が面倒を見ておられたので池田氏は、結城氏を語らつて、このお二人が中心になつて世話をなさつて此合併をでつち上げたといつてよいのです。併しよく考へて見れば合併は理屈はよくても平常無事の時には容易に出来るものではないが結局は連年の大不況の為弱体化されたのが其原因となり否応なしに之を遂行させたものとも云えます。大川氏としては一生紙に終始しようとしたので、誠に残念でありましたでしようけれども、併しもともと御自身で作られた王子を大きくして又王子にお帰りになつたというような訳です。大川氏が我が国製紙業の大きな見地から、三社合併に踏み切られたという経緯は、こういうような成行で御座います。

まあ話が大変長くなりましたが、もう少し側面からの大川氏のお話を申上げます。大川氏には、私は同業者の会合以外には余りお目にかかりませんのですが、只だ世間の評では、大川氏は傲慢無礼な人だとか、何んでも強引にやる人だ、紛争を起したあとに柔らかな田中氏が行つて柔らげて来て、二人の兄弟が好いコンビで旨くまとめてゆくとか、或いは大川氏は金に穢いんだとか云う色々世評をされて、王子を引退なさるについても色々な評を加えられたようなことがあつたようです。そのようなことが私の先入観になつていましたが、実際始めて会つて挨拶しても、大川氏は余り頭を下げない人でした。そんな訳で大川氏という人は噂さに聞いたように、始めは随分無礼な人のようだと、こう思つておりました。処が本当はそうではありません。他人の云うことをろくに聞か

ないというような風の点も或いはありましたでしようが、大川氏という方は誠に豪放で且つ緻密な人で、又た一面芸術を尊ばれ頗る質素な方でありました。まあ何にたとえましようか、大川氏という方は大きな山を見るようで、見る方面によつて違う。それだから一面からちよつと見て大川氏を評してはいかんなと思つたのであります。

。あの当時お慰みにやられた歌沢は全く名人の域でした。当時の実業界中素人ながら家元に次ぐ歌沢の巧者といはれたのは大川氏と味の素の鈴木三郎助氏でしたが、藤原氏があの出ない声で清元を習つて少し節が出来るようになつたら、先生、人を招いて聞いて呉れというので、大分迷惑された人があつたようですが、これを小笠原君が或時、大川氏に、藤原氏が歌沢をもやつているが歌になりますか――と尋ねたそうです。そうしたら大川氏の其の時の言葉の含蓄が面白い。これは私共でしたら、あれは歌になつていないと一言で云つて了うが、大川氏はそうは仰つしやらない。―歌というものはね、まあ十年十五年稽古して自分の声が自分に判るようになつて、始めて一人前になるんだよ、と申されて冷かすような素振りは少しも無つたそうです。藤原氏は無論下手に決つている、まあ下手の中に未だ入らぬ時だけれども、そうは云はない。これは中々面白いところで、心胸の広いところがあるように見られます。

それからも一つは慾張りとこう申しますが之れも当りません。今と違つて明治は無論のこと大正になる迄、実力者と申しまする方々は経営手腕があるのは勿論でありますが同時に実力即金力、投資力が無ければいかん。金を溜めておかなければいかん。それが故に大川氏も其の点に於ては余程御努力なさつたものと思います。そういう努力をした為めに、何んとか彼んとか世評を蒙る点もあつたかと思われます。併し世評は余り当てになりませぬ、こんな話があります。小笠原が向うに参りましてから一、二期あとでしたか、私に云うのには、――君、お互いに大川さんを慾張りだ慾張りだという世間の評判を聞いて、或いはそうなのかなと思つておつたんだが、決算で重役賞与を分配することになつて、実は案外に思つたよと云うのです。どういう訳だと聞いたところが、大川氏の曰くに、――富士製紙の賞与としては、どうも会社の利益の状態からいつて、そう余計に取る訳にいかんし元来総額としては少いんだから、其内で君達が余計に取つて呉れ、自分は別に困らないからと云つて、――自分のを少く専務以下を先生の何倍かにして分けて呉れたので、どうも勝手が違つたという話を聞いたことがあります。成る程大きくなる人は矢張り違うなと思いました。それから書生を養われて、しかも新聞等世間に発表されることを嫌われて、つまり陰徳を施されておつたと云うことを、この間成田君から伺つて、成る程大きな山を一面から丈け見て評してはいかんということを、益々思つたような次第であります。つらつら思いまする

と、此度大川氏生誕百年祭の主催者である桜影会々長の池田君が、大川氏の人格を心から讃えたお話があつたが、誠にその理由があることだと思います。

大川氏が極く質素であられたことを申上げます。私は二度お宅に伺つたことあり、一度は未だ向島のお屋敷の時で百花園のお近くのようでしたが、その日伺つたのは藤原、私、小笠原、井上、足立でしたか。向うさんは長谷川君始め其他鈴鈴木実君もおりましたか、四天王の面々が列席して、お宅で奥様のもてなしで御馳走になつたことがありました。お屋敷は旧家の跡の古い家をお買いになつたとかで、頑丈な作りの大きな田舎家で庭も広く、大きな池なんかもあつたようですが、その池の先きに田中氏の別宅がありました。ところがそれ丈けの構えでしたけれども、お座敷の床を見ますると一行ものが一ぷく掛つているだけで、ほか別に飾立てるものは無かつた。私は大体金の無いくせに書画が好きなのですが、その一行ものをよく見ますと、伊藤博文公の書いたものです。あとで大川氏の説明をお聞きしますと、渋沢翁が伊藤さんを自宅に招かれて、宴会をなさつた時に席書に、伊藤さんがお書きになつたという。文句は、「毒草野にはびこる」というのであります。その当時政客がはびこつて色々議論を上下した時代であつて、それで伊藤さんが困られてそんな文句に云い現わされたとも思いますが、それによつて世代の空気の一端が判ります。今日おられたら伊藤さんは何んと云われますか、或いは毒草以上に書かなければならんと思いますが、兎も角それを一幅掛けられておつた丈けで、誠に質素でありました。其の後又何かの会で待合せている間に、大川氏のお話を伺いました。その当時三井系の人は茶をやる人が多く。これは非常に金が掛るものでして、今でもかかるでしよう。大川氏が申されるのに、自分も茶は嫌いではないけれども、金の掛る無用なことはしたくない。僕の父が文雅な事が好きで、時々日本橋の中通に行つては何に彼と持つて来るから、それを後から持たしてやつて一割引で買戻して貰つているから、僕の家には何も無いよ。ただ自慢すれば景文が一幅あるよといわれた。成る程質素な方だと思いました。

それから田端のお屋敷に伺つたことがあります。これは富士製紙の株を王子が持つて、穴水の代りに誰れか王子から専務が欲しいという時に、大川さんから名指しで私に専務として来て呉れという話があつて、実はそれを断りに参上したのでありました。と申しますのは、三社の病は販売だ、この販売をてんやわんやでやるから三社が苦しむのだ。此処に何にか調整をしなければいかん。私は王子の販売を受け持つておりましたので、それが痛切に感じておりましたから、富士と王子の販売の調整を社長の指揮の下に私に委せるかどうかと云う条件を藤原氏に出したところ、藤原氏はそれは如何様にやつても嫌だとこう云う。それでは私が行つたところで甘くやつていけないから私は富士に行くのはいやだと言つたよう

な次第です。まあそんなこんなで結局藤原氏は、――それじや君、大川さんが君を名指して来たのだから、君が自分で行つてお断りして来いと云うので、私がお伺いしたのだが、丁度大川さんの御病気の初期の頃でしたか、その時にお目に掛つたのであります。お宅は矢張り大きな家でしたけれども、誠に御質素なものでありました。私はつくづく考えますのに、支那の言葉で日本に伝つて来て、日本人も普通使つている言葉に「吝嗇」という言葉がありますが、「吝嗇」という言葉は現今はひつくるめて、けちん坊だということになつております。併しこれは支那人の解釈を見ますというと、「吝」はけちん坊で出す可きものも出さない、取るものだけは取ると云うのが「吝」で、「嗇」は無用を節して有用な場合は適当に出すという意味であつて、「吝嗇」と二つ並べていますけれども意味は全く違うのであります。これを老子が解釈して、「倹にして慈、敢て天下の先とならず」と云つております。先とならずといふのは、人を押しのけて行こうということが無くてお互いに譲り合つて行く、お互いに人格を尊重し合い、お互いに権利を尊重し合うということで行くから天下が治る、こういうことを老子が云つて居りますが、大川氏は正に倹にして慈を実行なさつたお方であります。今更乍ら私はその人格の大きかつたことを尊敬して止まない次第であります。

話が長くなつて相済みませんが、もう一つ付け加えさせて戴きたいのは、田中栄八郎氏のことです。大川氏の御長兄の英太郎氏には関西で仕事をなされており、紡績業の方でありましたので、とうとうお目に掛る機会も御座いませんでしたが、田中氏には始終お目にかかつておりました。先き程申上げたように、大川が強引に行けば田中が柔らか手で行くんだとこう云う様な噂が出るように、田中氏は誠に人さわりの良い方でありました。そのような方でありましたから、其伝記を作る時に、花柳界その他も入れて賑やかな伝記にしたらどうかと、そういう方針で作らしているとか、私はほのかに聞いておりましたが、後で私はその伝記を見て、私の思つたことが書いて無いので大変失望しました。田中氏は柔らかな面もありましたけれども夫れは一面で、却々緻密な計画をもつて信念の強い方でありました。田中氏は大川氏と王子に入られ、王子の工場に勤めておられる時に、先き程申上げたように大川氏は技術の方をやられたが、田中氏は事務の方で主に材料の買入れ等をおやりになつておつた。田中氏の日頃のお話を綜合して考えると、日本の行く道は自分で出来るものは自分で作らなければならん、というお考えであつたと思います。今日お見えになつておられる石川君の御尊父と田中氏が協力して、関東酸曹会社を経営されていました。先代の小西喜兵衛さんなんかも協力してやつたんだと思いますが、此会社は苛性ソーダその他製紙に必要なものを作り、同時に肥料も作つておりました。今は化学工業というものが非常に興つ

ておりますけれども、当時から申しますと、化学工業を専門にやつておつたところは関東、関西を通じて誠に少なかつたのであります。

田中氏はこういう風な所にも眼をつけておやりになり、それから又た一つ新らしいものを残して下さつたのは今のフェルト会社です。これは日本では何十年という間、外国の品物を使つておつたのでありますが、これに眼をつけて、もうこれ丈け日本は発展して来たのだから、自分で作るのが本当ではないかと云うので、フェルト会社を目論まれた。これは大川氏は関係なさらんで田中氏独自の発意丈けであつたように思われますが、それで私の方にも勧誘があり三菱にも勧誘がありました。私の方は最後の株の締切りの日迄返事をしなかつたのは、どうせこつちでやつても超速力の機械には間に合わんだろうということで躊躇しておつたのです。ところが三菱が先きに判を押し富士も判を押し、君の方丈けだがどうだ、もうぐずぐず云わずに判を押せということで、藤原氏と私が田中氏の電話を聞いて、しようが無いじやないか、それでは仰せの通りにいたしませうと云うことで参加いたしまして一緒にやりましたのが今日のフェルト会社であります。これも全く田中氏の余徳みたいなものでしよう。それ迄は日本にはイギリスのフェルトとアメリカのフェルトが入つていました。アメリカはハイクという会社が入れていましたが、アメリカにも却々立派な人がおりまして、この会社の社長の老人が、――もう何年も日本で儲けさせて貰つているから、これから日本自身も自分で作つた方がよかろう、秘伝を教えるから技師をよこせと云うので、その交渉に行つたのが後継者田中寿一君で、寿一君はそういう際の交渉には手腕を有しよくやつてくれました。その為高橋君がアメリカへ行つて向うの技術を覚えて帰つて来ましたのです。当時の百四十二吋用も楽に作れるようになりました。

その外に田中氏は、未だ日本ではガラスの製造が発展していない時に、ビール会社の壜なんか作るガラス工場も作つておつたのであります。そういう風で田中氏は只だ柔らかい人であつたとばかり思つている方が、旧い方にはあつた様ですが、そういう様に常に新らしい工業に眼を付けられておつた人でありました。こういうことはどうも余り御承知でない方もあるようですので、今日大川氏を偲ぶと同時に、大川氏と形影相伴つて事業をなさつた田中氏の一面を、これもほんの一面かも知れませんが申上げました。

順序もなく大変長いお話をして相済みませんでしたが、御清聴を煩わしまして誠に恐れ入ります。つけ加えますがもう私も少々耄碌しておりますから、記憶の間違つたような点もあり、又お話の中に或いは怪しからんことを云つたと云うことがありましたら、どうぞ御遠慮なくお直しを願い度いと思います。

高窪喜八郎先生祝辞

大川先生は埼玉県の産んだ偉人である。埼玉県というよりは寧ろ日本が産んだ偉人である。学は東西に通じ識は古今に徹して、何故に東西に通じるかと云うことを、これは桜影会の皆様も学ぶべき点であろうと思います。例えば大川さんはサッポロビール会社の重役になると、すぐアメリカからビールに関する最近の著書を取りよせてそれを読む。そしてアメリカではこういう具合になつているといつて、八木さんという人だと思つたが、ビール会社の技師長さんをいじめる。これはビール会社の例でありますが、その会社に関係された各種の事業について、常に最新の本を取りよせて必らず熟読する。これを直ぐ事業の上に応用されるということで、我々はいじめられて刺戟を受けて勉強を一生懸命にやらなければならない。こんな具合でありまして、大川先生は、ある意味に於て実際の教育家であつた。そしてペーパーミルの技術についての後輩をどんどん養成して日本の為に尽した。

又青年を愛されて、私共は少なからざる知遇を受けておつたのです。今日といえども私は拙宅に於て、朝夕その知遇を謝し御冥福を祈つておるという次第であります。どうか皆様が大川先生の遺徳を学ばれて、そうして最新の知識を外国からとつて、日本の為に大いに利用し、日本の国力を発展させるということに御努力あらんことを希望いたします。甚だ簡単でありますが、祝辞に代えて一言申し上げます。

山口六郎次先生祝辞

只今御紹介を戴きました山口で御座います。司会者の幹事の方から何を間違いられたか、私共迄御指名を頂戴いたしま

した。ただ私は久しぶりで大川先生の御尊影を拝見いたしまして、感慨極つているのでございます。もとより祝辞なんて云う弁を申上げられる私でも御座いません。実は今日の先生の百年祭の主催者でございまする桜影会の方々以上に、大川先生には誠に数限りない恩顧、御配慮を蒙つている山口六郎次で御座います。その意味で一言御指名に答えたいと思うのであります。率直に申しまして、あの大川先生と申すものの偉大性はもとよりで御座いますが、その御生涯を通じて先生を感じまする私の眼に写るものは、真実そのものの姿であつたこと思うのであります。色々と見る人それぞれによつて其限界は御座いましようけれども、凡ゆる断面を通しまして、大川先生の持ち味、風格、真実を通した姿を私はつくづく思うので御座います。御家族の方々がおいでの席で斯様なことを申上げることは、誠にどうかと思うのでありますけれども、想出を明らさまに申述べることを御容赦願います。私などは一人の女房をどうも扱い兼ねている男でございまして、殆んど忘れて了つた昔の女友達から偶々手紙を貰いまして、これは一体何にかと女房に一本やられる仕末で、今でも斯うしたみすぼらしい男でありますから、当時の私はもつともつと粗末で貧弱な男であつたことを御想像願えると思います。併し私の心臓が強かつたせいか何にか判りませぬが、兎も角私は、大川先生の非常な御愛顧を賜りまして、よく先生が樺太へ御旅行される時など、先生が樺太からお帰りになられて上野駅にお迎えに参りました。そうすると大川先生は、奥さん及び愛人の方と申しましようか、色々の方の御出迎えを受けられて、もう可成りのお姿さんの方々の胸や頬をなでるようにして、お元気でよかつたなと挨拶をされました。あの駅頭であのような動作の出来る、あの大川先生の真実と申しましようか、全く偽わらない感情というものを出していらつしやる姿に、矢張り私はうたれるものを感じます。大川先生ともあろうものが、どうしてああいうお婆さんばかり可愛がつておられるのかと思つたこともありますが、これは山口、皆んな俺が若い時非常に苦労をかけた人々なんだと、先生が申されまして、私は本当に胸を打たれるものを感じました想出がございます。私などは元より代議士なんと云う柄ではございませんのですが、何の廻り合せか三十年程前に、山口政二さんという代議士が亡くなつて、その選挙運動に参加しておつたという因縁をもちまして、青年諸君からかつがれて立候補したのであります。私にはそう云つた気持ちは無かつたのですけれども、青年諸君が先に立つてやつてしまつたものですから、仕方なく立候候補したことがあつたので御座います。その時私の懐には五十七銭しか

無かつたので、一体どうなるのかと思つておつたんですけれど、まあ立つてしまつた以上ほつて置く訳にもいきません。私は毎日毎日演説会をやつておりますので女房が代つてお宅へ伺うことになりました。いま此処においでの方々で或いは御記憶を持つていらつしやる方もあるかも知れませんが、田端先生、それから大川先生に何んとか話が通じまして、とんでもない野郎だということでありましたけれども、大川先生は当時五万円という大金を私の女房に下さいました。これが私の全部の選挙費用であつたのですが、其の時は誠に鮮やかに負けて了つて、本当に申訳けないことをいたしました。当時の金を今日の金に換算しますと、大変に大きな金でありましたが、一介の貧弱な私にそうした御厚情を授けていただきました。元より私はそう云つた様な器ではないのでありますが、今日政界にあつて、乏しき乍ら私なりの政治的主張を持つて公僕たる可く日夜努力いたしおりまする私の魂の中には、大先輩のこうした恩顧に断じて答えなければならないと云う直情だけが、私の政治生活の規範をなしておることを、皆様に御諒承願いたいと思うのでございます。

それから旧い話でございますが、丁度此処に池田さんもいらつしやるので、もう一つ申上げます。大川先生は祖先のために、広い埼玉県の郷土の為めを思われまして、三芳野村のためには或いは信用組合を通じ協議会を通じ、当時数々のお仕事をなすつておつたのであります。丁度大正の末期のパニックで色々あちこちら多くの銀行が問題になつたのでありますが、当時の武州銀行、いまの埼玉銀行も、大川先生が其当時経済界に余りに多く手を広げ過ぎいるというな誤解やらで、支店の何処かで問題を起したことがあります。そこで田端さんや池田さんが非常に御心配なさつて、山口の野郎は埼玉の事情を良く知つている筈だから連れて来て一度相手の意見も聞いて見ようじやないかと云うことで、お呼ばれを受けたことがあります。日本の財界、実業界に於ては、大川先生の大きさと云うものは、誰れでもよく知つております。けれども、埼玉県下の関係におきましては何んと申しても未だお馴染みが薄いので、御多忙でいらつしやいましようけれども、広い視野に於て埼玉県の方へも色々な形ちで、先生の足をどうか向けて戴きたいということをお願い申上げました。それを契機として武州銀行の支店等を中心とし各地で懇親会等を開かれ、或いはその後教育会、青年団等いろいろな会合にも度々出ていただくことになりました。その後益々埼玉県のことにも色々御尽力下された訳ですが、先程来皆様方から御披露のように大川先生は、日本産業界の為めにあれ程広く大きな足跡を残されましたことは、御来会の皆様のよく御存知の通りで私共より申上げることは一切省略させていただきます。私は今年、衆議院の予算委員として、この五つの島に押し込められている今日の日本の現状から、北海道の重要性とその開発という立場からいたしまして、北海道をつぶさに

見て廻つたのであります。そして今日、北海道の処々に大きな産業組織の工場がどんどん出来るのをまのあたりに見、遙るかに樺太を眺めて私は考えたのであります。あの大川先生が当時樺太に真先きに着眼いたされて、ああした大きな産業を起こされた、又た北海道に於ても、今日に於ても尙ほ先生の大事業は大きな語り草となつております。今日の日本、今日のアジア、今日の世界の情勢から考えまして、今こそ日本の実業人を問わず教育家を問わず或いは青年たるを問わず、当時の大川先生のような大きな志と考え方をもつて、アジアの経済措置、教育対策というものを樹てねばならんと云うことを痛感する次第であります。大川先生は何十年か前に既にこうした点に着眼せられ、直ちに樺太にああした大きな仕事を起されましたが、斯様に雄大なる一つの着眼を直ちに実行に移されたという大きな考え方に、本当に心からなる心服と敬意を払らわざるを得ないと思うのであります。

今日大川先生の御生誕百年祭に当りまして、この真実の人、大川先生の魂を色々身近かに感ぜられ受け入れられて居られまする皆様方に訴えたいのであります。どうか大川先生の考え方、信念を見、聞き又た感ぜられておられます皆様方によりまして、現在おかれている日本の情勢に思いをいたされ、或いは東南アジアへ更に広く世界へ、皆様のその産業の理想なり技術の魂なり或いは教育の精神なりを持ちこんで、此処に大いなる明日の日本を作り上げることが出来ますならば、これは大川先生の謦咳に深く尊敬する我々の魂を本当に発揮するものであると私は思うのであります。私はそうした意味におきまして、こうした機会に、皆様方に特にお願い申し上げ訴えるものであります。幸に御賛成が多ければ有難いことであります。非常に幸せであると思いますることは、今日の主催者でございまする桜影会、この大川育英会というものが、当時の資金五十万円によりまして、この大きな業績が生れたということで御座います。今日は御承知のように貨幣価値が違つておりますので、五十万や百万とかでは何も出来ませんけれども、当時の五十万円という金は大変な金額でありました。今日皆様方の魂の中には、気持ちの中には、恐らく大川先生の魂というものが、夫々の姿に於てよみがえておいでになるであろうと私は信じます。大川先生の魂の一部であつた大川育英会の再建の発起人として、どうか皆様方こぞつて全員が御賛成願いまするならば非常な仕合せでございます。具体的な方法等はいろいろございましようけれども、この偉大な大川先生の魂を永遠に承け継いで参りたい、それを発表して参りたいと、私は本当に貧しき乍ら思う者の一人でございます。そうしたことによつて今日の百年祭の意義を更らに深め加えることが出来るならば、非常に仕合せであると存ずる次第でございます。この機会に、大川先生から本当に何に彼と御世話になつた、この乏しい山口が重ねて感謝の言葉を述べさせて戴いたということに皆様の御諒解をお願い致します。

埼玉県知事　栗原浩先生祝辞

このたび故大川平三郎翁のご恩沢に浴された方々並びに直接ご薫陶をうけられました桜影会の皆様方が、相より相はかられまして翁の生誕百年祭を盛大に催され、ここに翁生前の偉業と徳風を追慕し、報恩感謝の情を新らたにせられますことは誠に意義深いことでありまして、実に心温まる感じがいたします。

最近社会道義が低下し、恩義に報いるというわが国伝統のうるわしい風習が失われつつありますとき、この催しはまさに社会道義の高揚に一つの示唆を与えるものとして、私は桜影会の方々に心からの敬意を表する次第であります。

私は大川平三郎翁生誕百年祭にお招きを頂き参列の光栄を得まして、翁が明治、大正、昭和の三代にわたり日本経済発展に貢献されました歴史と波瀾変化に富む奮闘努力の伝記を回顧いたしまして、翁の偉大さに深い感銘を覚えた次第であります。わけても忍耐と克己をもつて、よく困苦と戦い王子製紙会社の一社員として出発した翁が六十有余の会社の首脳となり、わが国事業界の雄とうたわれ、永くわが国産業史に輝やいておりますことを回想いたしまして今更ながら翁の卓見と信念を追慕する情が、いよいよ深いものがあるのであります。

なお今日後継者大川鉄雄氏はもとより桜影会会員の皆様方が、いずれも産業界に財界に或は官界に教育界にそれぞれ重要な地位につかれて活躍し、いわゆる大川精神が皆様方によつていまなお赫々と生き輝いておりますことを思い、私は一段と感銘を深くした次第であります。

申し上げるまでもなく大川翁は、まさに日本の生んだ実業界の偉人であり教育育英の大恩人でありまして翁の生誕地埼玉に生を受けた私達県民はいうにいわれない親近感と、ほこりを、もつて翁を敬慕し、崇敬しておるのでありますが、今日の百年祭を契機にますます先生の遺徳を顕彰し、後継者の育成に努めたいと念願しております。

終りに桜影会の限りなき御発展をお祈りいたしましてお祝いの言葉といたします。

昭和三十四年十月二十四日

埼玉県知事　栗原浩

製紙業発展の基礎を確立した大川平三郎

成田潔英

私は製紙博物館々長を勤めておりますかたわら王子製紙会社史の編纂に当ってまいりました者であります。本日は大川さんの御生誕百年を記念する御祭に参列の光栄に浴しまして誠に感激に堪えません。と申しますのは王子製紙会社史はもとより、日本の製紙業の歴史も、大川さんを抜きにしては語ることが出来ないからであります。私がこれから大川さんのことについて申上げようとすることは、後年の偉大なる大川さんがどうして出来たかということでありますが、これはとりもなおさず、日本の製紙業の偉大になりました生い立を申し上げることともなるのであります。

徳川家茂の治世の万延元年（一八八〇）に、藤原銀次郎翁より約十年の兄として生れた大川さんは、明治八年十六歳の時、開業間際の後の王子製紙会社前身の抄紙会社に入社し爾来十九世紀最後の四半世紀即ち明治三十三年迄にボロパルプ、ワラパルプ、木材パルプ等製紙原料の創製に成功し、わが製紙業の基礎を確立した偉大な先覚者であります。

大川さんはその一生を通じ、すぐれた技術者であると共に、企業家でもありました。いいかえれば、大川さんは事業の化身であつたともいえましょう。その事業は多種多様にわたり、大正元年以降でも実に六十七、これに明治年間のものを加算すると、八十有余に及ぶ多数の事業に関係し、且つ全力を注いだのでありました。しかもその中で、終生の事業として生命を打ちこんだのは、何といつても製紙業でありました。

それでは以下大川さんが製紙者としてスタートされた少年時代から、九州製紙を引受けて大川個人としての独立経営時代に入られるまでの事柄を、極く簡単にお話し申上げて、御参考に供したいと思います。

一　徒弟としての大川さん

前に申上げました通り、大川さんが抄紙会社に入られた時は、丁度製紙機械の据付中で、先ず建築技師の英国人チースメンの助手としてでした。その証拠にはその時の辞令に「絵図引申付候事、月給金五円也」と書いてあります。機械の据付整備が終ると、今度は抄紙技師ボットムリーの助手として紙すきの手伝をされることになりました。いわばこれが大川さんの一生の目的で、何とかして一日も早く製紙術を覚えようと、朝から夕方までボットムリーにつきまとつて働きまし

た。明治十年五月ボットムリーが任期満了と同時に帰つたあとは、大川さん独りで紙をすくという事になりました。一日ドライヤー(乾燥機)から光沢機に移るところで紙が切れました。この紙を上手につなぐことは大川さんの大切な仕事の一つでありましたから、ドライヤーから一分間に壱百三十呎の速度で出てくる紙の端を取りながら「アア熱い、アア熱い」といいながら、苦心しているのを見た仲間の一人が、如何にも痛快そうに「お前の手の皮があつけりや、面の皮でやれ」と冷笑したという事であります。

大川さんは仲間から何といわれようが、そんなことには拘泥せずボットムリーの指導を受けながら、一生懸命に機械の操作を研究した結果、いつしか一人前となり、大川さんなしには作業が進行せぬようになりました。こうなれば作業全員の信頼を否応なしに得るようになり、又その半面大川さんに対する嫉妬心も強くなりました。

「当時小さい船であつたが品川から石神井川を溯つて王子工場の岸壁に横付けになり、この工場でどんどん稼いだものだ。その時石炭の目方を水で誤魔化すもんだから、僕はそれを防ぐのに相当苦心したもんだ」とか、「明治八年と云えば相当不景気な時であつたが、当時王子においしい天ぷら屋があつて、わざわざ品川から屋形船を仕立てて石神井川を上り喰いに行つたものだ」とかよく当時の述懐談をされました。

大川さんの第一回洋行

大川さんは抄紙技師のボットムリーから、製紙術を教わりましたものの、彼は一ヵ月二百円という高給を取つており、自分はその四十分の一の僅か五円しか貰つていない。こんなことでは国家的不経済だから、一日も早く一人前の技術者になりたいと努力しました。明治十一年頃になるとその自信も出来たので、会社宛に約六千字におよぶ一大建白書を提出して、米国における製紙術研究の要を論じ、自身その任に推薦されて明治十二年に第一回の渡米をしました。この時大川さんは僅か二十歳の一青年に過ぎなかつたのであります。

かくて大川さんは明治十二年七月、わが製紙業将来の運命をになつて渡米することになりました。その時彼の同僚は一人も彼を横浜まで見送る者はありませんでした。如何なる彼もそのためか多少悄気ぎみでしたが、其頃横浜で石炭商をしていた浅野総一郎だけが見送つてくれました。大川さんは浅野の店で昼飯の馳走になり、二人で二人引の人力車に同乗して波戸場まで出かけました。処が、大きな男が二人も乗つているので途中で車の梶棒が突然折れて路上にほうり出されましたので、それから歩いて船まで行つたというエピソードが伝えられています。しかし其時会社から誰一人見送らなかつたことが却つて大川さん自身の奮起の動機となり、渡米後ホリヨークの一製紙工場に職工として入りこんで一生懸命に勉

強しました。

中井商店への製品販売交渉

抄紙会社創業後数年間は、会社で製品の直売をしていましたが、明治十五年頃になると、それだけでは全製品を売捌くことが出来なくなりました。大川さんは当時の最有力販売店で神戸製紙所製品の一手販売をしていた、京都の中井三郎兵衛を同年三月訪ねて、王子製品の売捌方を依頼しました。が、当時の王子製品は神戸製紙のものに比して著しく劣つていましたので、中井は即答を避けました。一方、大川さんは此の事を思いきれず、五月になつてから荷為替で二十七個ほどの洋紙を、神戸の中井出張所宛に送り届けました。

不意をつかれた中井さんは大川さんのやり方に一旦は驚きましたが、製品が来た以上は送り返えす訳にも行かぬので、自身早速上京して渋沢社長に面会し、大川さんのやり方について厳談に及びました。しかし遂には中井も渋沢さんに説得されて、王子製紙製品の一手販売を引受けることになりました。是れ実に明治十五年十一月のことであります。これを見ても大川さんの熱意が、紙を造る外その販売にまで及んでいたことが分ります。

ワラパルプの創製

大川さんは第一回の米国留学から帰つてから、さつそくワラパルプの製造に努力されました結果、明治十五年に首尾よく成功して、ワラパルプ、ボロパルプ半々の配合の新印刷紙を製造して当時の各新聞社に提供しました。処が、その頃新聞紙を印刷していた秀英舎主の佐久間貞一が、紙の色が薄黒くて困る、もつと良いものを抄いて貰いたいと、大川さんに申入れました。

すると大川さんは、日本のような貧乏国で良い紙を新聞紙に使うのはもつたいないと、製造家でありながら消費者の懐勘定にまで立ち入つた議論をして佐久間をやりつけたのでありました。しかし、この新製品が出来てから安い外国品と有利に競争することが可能になり、一種の安定を得ました。

四日市製紙の新抄紙機を診断す

明治二十一年に三重県の四日市という町に、四日市製紙会社が出来ました。当時、この会社に最新式の米国製百吋幅の長網抄紙機を据附けました。そして愈々機械の操業にかかつて、その運転を始めて見ますと、一分間に三百呎の紙が連続して出る筈なのに、紙が切れて切れて仕事になりません。工場技術者等は面目にかけても円満操業して見せると、約一ヵ年間頑張りましたが、遂に成功せず、結局は当時の製紙技師としての第一人者である、大川さんの助けを仰ぐことになりました。

その頃大川さんは王子製紙の気田(けた)工場建設に多忙を極めて

おりました。四日市製紙では何が何でも大川さんに来て貰わねばならぬと、大川さんに頼み込みました。その頃は未だ東海道鉄道が開通しておらず、三重県の四日市町に行くには、名古屋から小汽船にゆられて行くほかありませんでした。四日市製紙では大川さんに何程の謝礼をしたらよいかと聞きますと、大川さんは色々考えて見た上、「日当として七十円いただきましよう」といわれた。当時の七十円といえば県知事も取つておらぬ大金で、しかもこれが日当と云うのだから、使いの者はハッと驚きました。然し機械が操作不能なら紙が出来ずに、毎日何百円という損失が出ることを考えると、これだけ支払つて一日も早く機械の正常運転が保証されれば、寧ろ安いものだろうと思いました。

元々、大川さんは機械いじりの好きな人ですから、四日市製紙から機械の診断を頼まれると、腹心の部下の一人を連れて工場に行きました。そして工場にはいつて新しく据付けられた機械を見ると、一見美事に見えます。が、詳細に調べて見ると機械据付けにバランスが取れていないことを発見しました。そこで大川さんは昼間の内に機械の運転をして、悪い個所の音を聞き、夜間に徹底的な調査をすることにし、手伝いの者に、「今夜は徹夜だ、何か夜食を用意しておけ」と命じました。

その頃の四日市町といえば、全くの田舎町で、うまい物といつても何もない。それでも種々苦心して探して見たところ、イナゴの佃煮がやつと見つかりました。仕方がないから握飯と佃煮とを用意して、その旨を大川さんに話しますと、「こんな際何もぜいたくな物はいらぬ、それで結構だ」といかにも張り切つた返事でした。夜になつた。大川さんは菜葉服に着かえ、先ず機械の金網部の真下にくぐつていちいち点検し、次で圧搾部、それから乾燥部と一晩かかつて、第一回目の検査をすませて、如何にもうまそうにイナゴの佃煮をお菜に握飯の夜食を取り、更に今一度同じ方法で全機械の検査をすませる頃になると、東の空がほの白くなつて来ました。丁度その頃、大川さんは大声で「分つた」と嬉しそうに叫びました。製紙機械据付の欠陥をつき止めたのであります。

それから一、二週間かかつて大川さんの指図通りに機械の据付け直しをしました。そして操業して見ますと機械は美事に運転し、待望の紙は連続してドンドン出て来るようになりました。四日市製紙の人々も、さすがは大川さんだ、日本一だとその信頼を一層深くしました。

王子製紙気田工場の建設

この工場は日本における最初の木材パルプ工場であります。明治十六年頃になりますと、欧米諸国では早くも木材から製紙原料を造る方法が行われていることを聞いた大川さんは、そうなら何とかして其の方法を日本に取り入れねばならぬと、同十七年に第二回目の洋行をして、木材パルプ製造法

を研究しました。翌十八年に帰つて来て、現製紙博物館のある元の王子工場内で、木材を秩父の山から取り寄せて、鉄板製の釜で木材片を煮て造りましたが、思うような成績を得ることが出来ませんでした。そこで大川さんは同二十年に第三回目の洋行をして、今度は特に欧州のパルプ工場を視察して帰つて、静岡県山奥、秋葉山のふもとの気田（けた）という処に本格的のパルプ工場を造り、あらゆる困難を克復しながら、明治二十二年の秋わが国における最初の木材パルプの製造に成功しました。そしてこれを契機に従来のボロパルプ一点張の製紙時代から、木材パルプ時代に移行する基を築きあげました。

新聞用紙工場の建設

気田工場創設後十年して日清戦争が起り、新聞紙が飛ぶように売れました。紙がどれだけあつても不足するという状況でした。王子製紙はこれは時勢の然らしめるところと予想して、同じく静岡県の山奥に中部（なかべ）工場という新聞用紙製造の専門工場を建設することになりました。この工場は大正十二年に廃止され現在は三十五万キロワット出力の有名な佐久間ダムがあります。

その時、高等工業機械卒業の高田直屹という一青年が入社して、中部工場詰となりました。大川さんはこの高等工業教育を受けた高田技手を試めして見ようと、或日彼にアメリカの機械型録を示し「この機械を内地で作ることにするが、君、責任を以てその任に当つて貰いたい」と命じました。高田はこれこそ一大試練であると思つて緊張した。

高田は型録を詳細に検討して、工場開業直前に作りあげました。大川さんは大満悦です。それでは早速試運転しようと、その準備に着手させました。由来、機械の能力には最小、中間、最大の三通りがあります。高田は学校出身だから万全を期する質で、どつちかといえば多少とも臆病であります。それで此の機械は中間能力標準に設計製作したのです。運転準備がすむと大川さんの命令一下運転が開始されました。高田は先ず最小能力で運転を始めました。次で中間能力に移しました。機械の調子は上々であります。高田としては大川さんが、これでよろしいと云うのかと思つていましたら、「君、もつと能力を上げたまえ」といいます。高田は当惑しました。そしてこういいました。「此の機械は中間能力を標準に設計してありますから、これ以上能力を上げると危険です」と。すると大川さんは「型録には最大とも書いてあるではないか、それなら大丈夫だから、もつと能力を上げたまえ」と命じます。高田は気が気でない。ヒヤヒヤしている。学校出の悲しさ大胆さを持たぬ。一方大川さんは実地上りの人だけに如何にも大胆。高田も命令だから止むを得ず最大能力まで上げました。が、それでも機械は何ともない。それを見た大川さんは「それ見たまえ、出来ぬことはないでは

ないか」といつて初めて満足の意を表しました。これ以来高田は大川さんに頭が上らず、終生交友を続けたということであります。

九州製紙設立と独立経営

明治二十七八年の日清戦争に勝つた記念として、資本金壱百万円で熊本県八代郡松求麻村坂本にできた東肥製紙会社―現十条製紙坂本工場―が、同三十二年開業間もなく火災にかかつて全焼しました。会社重役連中はその再起のため住友銀行から三拾万円借り入れて大いに努めましたが、それでも旨く行かず、遂に破産の浮目を見ました。その時、此の会社は米国貿易会社に機械代金の未払金が二十五万円ありました。二十五万円といえば当時としては莫大な金額です。貿易会社の支配人は一時は当惑しましたが、これを大川さんにやらせたら何とか復興するだろうと思い、大川さんに交渉しました。

そこで大川さんはその申入に副うため東肥製紙会社に行つて、工場設備一式を具さに調べて見ますと、バグレーシオール会社製百吋機械二台で、仲々立派なものです。大川さんはこれなら復興出来ぬことはないという確信を得ましたので、これを四十万円に買うことにし、米国貿易の二十五万円の貸金は自身で責任を負うことにしました。

その後工場設備を一層入念に調べて見ますと、工場買入値の四十万円はおろか、その倍額の八十万円の値打があることが分りました。大川さんはこの工場を土台に大川式経営法を実施して、日本の製紙業に一新紀元を劃し、ひいては将来の大樺太工業会社を設立する基を築き上げるに至りました。

今日は大川されの生誕壱百年祭に御招きを受け、ここに長々と御話し致しましたに拘らず、御静聴下さいまして厚く御礼申上げます。

大川、田中両翁の想い出

石川一郎

只今御紹介をいただきました石川でございます。実は私の処に電話がかかりまして何にか昔の想出の話をして呉れろと、お話がありましたので、ちよつと時間を拝借いたし昔ばなしをし度いと存ずる訳でございます。

大川さんは非常に多くの種類、まあ金融から鉄工から、勿論製紙、船、鉄道と云うふうに各方面に於て御仕事をなさつておられましたけれども、実は私は、大川さんの御仕事に何も関係が無かつたのでございます。それは大川さんの弟様でいらつしやいました田中さんに、私は非常に御世話になりまして、田中さんの御関係の御仕事には二十数社もありましたでしようか、随分あつたようで、御一緒に関係しておつたのです。ただその間にありまして大川さんから色々お話をうかがつたことがございます。直接お話をいただいた訳で、それが非常に頭の中にこびり付いて居いまして、未だこの齢になつても忘れ兼ねているような問題がございますので、そういうことを御話申上げ度いと思うのでございます。

実は田中さんは、何ういうものですか、私を非常に可愛いがつて下さいました。中学校から高等学校へ入る時も、色々と私に注文を付けられ、此処へお前は進まなければいかんと云うことで御説教をいただいて、その通り入つたのでございます。私は中学校から高等学校を受けます時に、あの時分には二部甲というやつと乙というのがありまして、乙の方は理科、医科、農科、物理とか天文とか。甲の方は工業であつたのです。私は何んだか知らないけれども、天文をやり度いという気分が若い頃ございまして、それで其処へ入ろうと思つていましたが、試験を受ける前、願書を出す前に田中さんから呼ばれまして、こんこんと色々喩されたのでございます。お前が育つたのは、親父が工業をやつておつて育つたのではないか。天文も良いかも知れないが、そんなことをやるよりは矢張り工業をやらにやいかんと云うことを仰つて頂きまして、それば私も返えす言葉がなく、工業の方へ向いました。

学校を出てからその後も矢張り、お前の往く道はこうだというお諭しがあつて、その道をずつと歩いて参りました次第で、もう田中さんには非常に御世話に相成り、今でも有難く思つて居ります。

そう云う訳で、田中さんとは色々御一緒に仕事をしておつたものですから、昔からよく宴会などの接待がある時、田中さんと私は一緒に出て行きました。そうすると、まあ之れは大川さんも贔屓にしていらつしやいましたが、天ぜん、小勝、貞山だとか、ああいう人が沢山居りました。そういう時に偶々田中さんがいらつしやらないと、私は何にか身内の人と間違いられたのではないかと思うのですけれども、名誉なことでございますけれども、ああいう人達が、今日は大旦那はどうしました、とこう云うのです。社長さんとは言わないのです。その咄家の先生達は直ぐ私に、大旦那どうしましたと聞く、まあこう云うような位に、田中さんは私を、しよつ中一緒に連れて歩いていただいて御教えを頂いたのでございます。まあそう云う関係でございましたから、大川さんから見れば、自分の弟さんがそういう風に面倒を見、自分の子供のように面倒を見ている私でございますから、之れには、まあ時々注意したが良いという思召めしがあつたんだろうと存じます。それで色々とお話を伺つたのでございます。

先ず第一に伺いましたのは、大川さんが洋行なされた前後のお話であります。大川さんは御自分の意志で早く向うを廻つて来られました。二十歳前後で洋行されました。その当時さき程もお話があつたように、いろいろ同僚からのそねみやねたみというようなものがあつたようでございます。洋行していらつしやる間に色々手紙をお書きになつたり、仕事の御報告を充分、会社の方へなされたそうです。それで会社の方の仕事も旨く行き、又その為めに友達や同僚は大川さんのお蔭で、向うの事情を良く知ることが出来たと云うようなことで、お帰りになる時には、出掛けられた時とは全くうつて変つてもう大変な大歓迎であつて、皆んな揃つて多数の人々がお迎えに行かれたと云う話を伺つたのであります。

それからこれは私が願つたのではございませんけれども、お前も洋行しろということになつた訳ですが、その時に丁度私は、大川さんからその話を伺つたのでございます。それで私も外国へ出掛けることになつたのですが、当時私も未だ若く二十八、九歳で、矢張り諸先輩がいらつしやるのを差し置いて行くような次第になつたのであります。それで大川さんの過去の御経験を教えて頂いたものですから、私はそれに依つて手紙も書きましたが、実は私は、手紙の長いやつは四十頁ぐらい書いて、本社の方へ送つたりしたこともございます。まあ斯様な次第で、大変に良い御教訓をいただいて、私は私なりに出世の基にさせていただいたと云うこともございます。

それから又た次のようなお話も伺いました。何んでもあれ

は谷さん、谷けいぞうさんと云う方がいらつしやつて、その方の支配人か何にかなさつておられ、其処のお子さんは丁度我々と年配が同じであつたのですが、そのお家にたしか寄食されて居られたのではないかと思うのであります。まあ居候と申してはいかんが寄食されて居られたようです。その当時のお話だと思うのですが、何んでも早く起きられまして、その御主人の机の上の整理とか或いは庭の掃除とか、そういうものを御主人が気のつかない中に悉皆やつておくと云うことでした。その御主人というのは谷さんでしたか増田さんと云つたか記憶がはつきりしませんけれども、その御主人が何時でも気持ち良く机に向えるように、常日頃整頓したり色々なされて始終気をくばられたということを話しておられました。これは丁度あの秀吉が藤吉郎の時代に信長に仕えてお供をしているとき、草履を自分の懐の中へ入れて暖めて、何時でも主人である信長の足が冷くないよう気をくばつていたという話と同じ様だと非常に感じました。矢張り我々もそういう風なことは、心掛けとして持たねばならんものだということを教えられました。

それから其時分にまあ明治の十年前のことでございましようが、大川さんの月給が五円で、それが一円上つたとか何んとか噂さが出て、その時田中さんは日給八銭であつたと伺つたり色々教えていただきました。それからまた話が少し飛びますが、あれは南朝鮮鉄道というのでしたか朝鮮鉄道を、大川さんがやつて居られました。それで大川さんが朝鮮へいらつしやいましてお帰りになり、おい石川、俺れを御馳走しろ、俺れは非常にいいことを考えて来たから御馳走しろと申されるので、それでは田中さんと御一緒に御馳走しようじやないかということになりました。新橋だつたか柳橋だつたか何処か忘れましたが、来ていただいてそのお土産話を伺いまして、それは成る程と思つたことがあります。それは大川さんが朝鮮を視察に行かれまして、将来どういうふうに朝鮮の鉄道を延ばすかという計画をなさりに行かれたのですが、たしか長谷川太郎吉さんも御一緒じやなかつたかと思います。それで帰つて来られまして、俺達はこれから朝鮮で鉄道を延ばすのだが、鉄道を延ばすところは、只だ景色が良いとか山の中に引つ張るのではない、矢張り農産物とか荷の多い処へ鉄道というものは引つ張るものだ。だからどうしても平地に引張つて行くものだ。そうすると君等がやつている肥料会社では、そういう平地の農産物の出来るところが御得意様だろうから、僕には、こう云う処にこういうふうに線路を引つ張つて、そこへ停車場をおくということが判つているから、其処へもつていつて早く店を置けと申されるのです。そうすれば肥料の配給に非常に便利じやないか、成る程大変有難うございますというので、御礼を申上げてそのお話を伺つたようなこともございます。

こういうふうに色々教えていただいたことが沢山あります

が、次ぎに申上げたいことは読書の問題即ち本を読むことの問題でございます。大川さんは若い時分から、英語は勿論自分で御勉強になりましたが、そして渋沢さんから益田さんへ手紙を書かれて、大川は洋行し度いと云つているが、英語が出来るか出来ないか試験をして呉れということを、お頼みになつたように伺つております。そして益田さんが誰れかに頼んで、大川さんの英語の試験をしたところが大変に出来るので、ああこれはもう洋行させても良いというお話があつたと聞いております。とにかく大川さんの英語は非常に達者であつて、然かも英語は普通の英語ばかりでなく、我々が高等学校あたりで、昔の高等学校ですよ、そのあたりで物理や何にかを勉強した同じ程度の本を、全く独学で既に二十二、三歳の頃にもうお読みになつていらつしやつたようです。物理にいたしましても化学にいたしましても、それからアダム・スミスの経済の本なども読んで居られて、そう云うことによつて自分は技術ばかりではいけない、いろんな事を知らなくてはならないと云うので御勉強なさつて、然かもみな原書でお読みになつた。又た私が驚きましたことを一つ申上げますと、大正の終りか昭和の初めでしたか、丁度お宅に伺つた時、豪華な本棚を見ていますと、お前はこの本を読んだかと、大川さんが云われるのを見ると、それはマルクスの本なのです。大川さんは既にマルクスを読んで居られた訳ですが、私は未だ読んでおりませんと申上げると、何にしろ之れを読んで見ると、俺達はとても三井や三菱には、いくら経つても叶わないということを嘆いていらつしやいました。要するに資本、普通の資本の集中が出来ないと云うことでしよう。益々金持ちは金持ちになるということでありまするが、そう云うことをマルクスで読んで、私に嘆いていらつしやつたことがありました。先程来お話にもありましたように、まあそういうこともありまして大川さんは兎も角非常に勉強をなされた方で、小説なども英語の原書でお読みになつているように、私もお見受け申した次第で、大変な勉強家であられました。

それから又た面白いことがあります。それは大体、大川さんにして田中さんにしても、これは依然旧体制でして、お両人共人を待たせることは割合いに平気のようでした。そして又た周囲の皆さんも出掛けて行つて待たされることを覚悟していたようです。皆様方も御存じと思いますが、早川徳次さんという人がありました。この人は甲州の方で早稲田大学を出られてから、自分はどうしても地下鉄をやると云うので、鉄道に入られました。当時の国有鉄道でしたが、切符切りから駅長までやつて満州まで行つて帰つて来て、それから地下鉄を調べにたしかイギリスへ留学されたんだと思います。それでロンドン辺りで地下鉄を調べて帰朝し地下鉄を始めたのですが、どうも旨く行かないので非常に弱つちやつたと云つて、大川さんに、どうか援助して呉れろと云うことを頼みに来られた。そして早川君が大川さんに、その地下鉄が、所謂

表面電車より如何に有利であるかという御説明をなさつたのです。大川さんは暫らくその話を聞かれておりまして、よしつ助けてやろうということになりまして、それ迄大川さんは既に地下鉄の株を持つていらつしやつたかどうかは存じませんけれども、じやあ助けるについては更らに一万とか二万とかの株を買おうということをお決めになつたのです。その時偶々其処に居合わせて、その話を聞いていたのが、今日此処に来ていらつしやるかどうか知りませんが、小西のやす次郎さんとちようじさんでした。丁度其処で田中さんに存たされている間に、その話を聞いておつた訳です。それで大川さんが其仕事を良しと見て、株をお買いになると聞いたもんだから、これは大川さんのおやりになることに間違い無いだろうと云うので、二人で以て何千株か買つたんです。当時地下鉄の株価はそんな情況で二十円とか三十円とか値段が落ちていたそうで、その安い処を買い後で高く売りまして、まあどの位儲けたのか知りませんが大変金を儲けられたそうです。それで小西さんが申すには、大川さんの処で何時も待たされるのは困るけれども、斯ういうこともあるから偶には待たされることもいいじやないか、というようなことをお話しなさつてゐたこともありました。

そんなことで大川さんには色々面白い話がつきませんが、私は未だに判りませんので、これはどうしても御遺族の方に伺つて置きたいお話がございます。あれは確しか今の十条製紙の分工場になつている工場が出来た時分のことと思いますが、訓路のやつなみというあそこの山の上に料理屋がありました。私もあの工場を見せていただき我々も着手の仕事があつたものですから、其処へ出掛けて行つてやつなみに泊りまして、大川さんの色々の噂さ話が出ましたんです。そこのおかみさんが云うのには、大川さんは非常にいいお客様なんだけれども、あの方が一週間もお泊りになると、こつちの体が参いつてしまいますと云う話でした。どうした訳だと聞いたところが、大川さんは朝早くお出掛けになつて夜は遅く帰えられる。それから直ぐ哥沢を始められる、それから御風呂に入つて漸やく御飯を召し上がると云う次第で、そうするとすつかり済むのが何時も夜中の一時から二時になると云うのです。しかもその翌日の朝はいつでもお早い。それ丈けならいいんですが、その翌朝顔をお洗いになる時に、風呂桶一杯位のお湯が要ると云うのです。これが判らないのです。こういうふうでしたから大川さんのお付きの方が夜遅く風呂に入つてから、それを奇麗に落して翌朝暗いうちにお風呂を沸かして、朝早く洗面用のお湯を御風呂一杯用意しておかねばならないので、毎朝のことですからこつちの方の体が参いつて了いましたと、こぼし話をしておりました。まあそういうふうなことを伺つて参りましたが、大川さんは朝そんなにお湯をお使いにつたのでしようか、どうも判りませんナ。

猶ほこれは田中さんと大川さんの合作ではないですが、一

緒の仕事に御二人が在つたので、色々のことが円満に進んだという内部の話の一つなんですけれども、こういう話を田中さんから伺いました。大川さんはまあ非常に気性の激しい方で、勿論技術のことも経済のことも色々の知識を普通の方より並以上持つていらつしやる。気性が激しいので時々重役会等で、社長の大川さんはこう行けと云う、他の重役は挙つてあつちへ行けと云つて、意見が二つに割れて了うことがある。そう云う場合に実際にどうして処置したかという話を田中さんから伺つたのです。これは非常にいい話ですから、私は方々で、実は名前をあげて申していることもあるんです。これは大変いい例でありまして、田中さんの申されるのには、世の中のことは片一方が百点で、片一方がゼロということはない。例えばこつちの道を行けばこういう風な方法をとつて行けば八十点、そつちへ行けば七十五点だという差だけであつて、大体のこの見込みをたてて相当の人達がやる以上は、大してそう差があるものじや無いと云うのです。そういう時に今のように議論が二つに別れる訳なんです。それでそういう場合に田中さんはどうしたというと、社長が必らずこうしなさいと云つて何うしても聞かなければ、仕方が無いから社長の云う通りに行きましよう。但しそう決めたならば社長の方針に従つて全力を上げて皆んなでやりましよう。要するに今迄社内でさんざんぱら議論しつくした訳ですから、その後は社内で意見が二つに割れるようなことをしないで、一つに決つた方向に皆んなで成功させるように力を合わせてやれば、初め七十五点と思つたものも九十五点になるものだ、というお話でございました。私もそう思います。

之れは非常にいいお話でありまして、私はよくこの頃学校から出て来る若い人々に講演を頼まれますが、そういう時に集つた何千人かの若い人達に向つて、世の中のことで、自分の意見を通そうとするのもいいけれども、譲つても良いことがあるぞ、と云う話をする一つの例として、又たそれを成功せしめるには、こうして成功せしむるものだという話の例に、以上のお話を使用しているような次第でございます。未だいろいろお話を申上げたいことがありますが、何分にも大体のことは皆さん御存知だろうと思いますので、この辺で終りにいたします。私はお仕事の上では、大川さんには何んにも縁故が無かつたのですが、先き程申上げましたように大川さんから直接、知識なり或いは心得なりを教えていただきましたし、又た田中さんには親にも優る御厄介になつた次第でありまして、今日までの御恩顧は到底言葉では云い尽せません。本日この席を拝借いたしまして厚く御礼を申上げる次第でございます。どうも有難うございました。

挨拶

名誉会長　大川鉄雄

かような処から御挨拶を申上げることは、甚だ僭越至極で申訳ございませんが、おゆるしをいただいて一言私共の心からの御礼を申上げたいと思います。本日は誠に好天気に恵まれて、皆様御多用の処を斯くも大勢の方々のお集りをいただきました。司会者であります桜影会の皆様、また父が長年御懇親をいただきました高島さん初め皆様方より、色々と父を偲ぶお話をうけたまわり、私共は本当に思つてもみなかつた非常に盛大な、殊に意義深いこの百年祭を催うしていただきましたことは、何んとも御礼の言葉に尽せない思いが致します。

申し方が変でございますが、私はこの席に加わり、本日のこの盛会を見せていただきまして誠に残念に考えられますこと、また申訳無く考えられますこと等を一、二申し述べさせていただき度いと存じます。その第一は、実は私共兄弟の中で一番元気者でありました義雄が、早く亡くなりまして、本日の席に列し得ないことであります。私として之れは第一に残念に考えております。

只今皆様方からお話をいただいたように、父は仕事を非常に良くやり、同時に又た教育方面にも力を尽くしたようですが、文字通り日夜教えて賢ならざるは、父の誤りだと云うようなことを、始終父は口癖のように申しておりました。然るに不才の私などは、毎日教えられたと云うよりは毎日何回か小言を云われ乍ら、現在に至るも遂いにどうも不肖の子という様なことで、今日に至りました。幸いに皆様の色々な御配慮と御引立てによりまして、どうにかこういう地位に居ることが出来ます訳でございまして、その意味からも心から御列席の皆々様に深く御礼を申し上げ度いと存じます。最早六十の手習いでございますが、猶ほ又た先輩各位の御薫陶を頂戴いたしまして、及ばず乍らも更に一層努力いたし度いと考えておりますので、この上とも何分の御指導と御引立てを御願い致し度いと存じます。御礼を申し上げて続いて御願いを申述べる等甚だ勝手なる申し分でございますが、つい余りに盛大な百年祭をとり行つていただきまして、その嬉しさの余り、何かと勝手がましいこと迄申上げましたような次第でございます。一同に代りまして、今後共又は大川家の者共を宜しくお願い申上げまして、本日の御礼ともども深く感謝いたします。

余興披露と紹介

池田桜影会長

大変長い間、大切なお話、又大変参考になる面白い話をうかがいましたが、今日は大川先生及びその影の形に添う田中先生のお姿が大変ここにクローズアップされて参りましたことを有難く感謝にたえません。今迄のお話は大体、富士山で云えば、吉田口からの上りのように思われます。いよいよこれから、御殿場口へ向つて降りられた、下界に於ける大川先生を伺いたいと思うのでございますが、実はこのプログラムに余興と書いてしまつて、大変失敗したのでございます。余興と申しますというと、何か特別にこういう専門家をお招きして、皆さんに御覧に入れるのが立て前なのでございますが、実は今日の出し物は余興ではなくて、本興なのでございます。と申しますのは、本日ここに御名前の出ております方々は、何れもみな古い、大川先生の御恩顧、御愛顧を受けられた方々でございます。それでこの百年祭に於て、その当時を想い浮べながら、大川先生に、こういう柔らかい方の芸を、是非お捧げしたいと、こういうような御趣旨で御出演下される方々でございますことを、ここに改めて皆様に御披露申上げておきます。従つてこれは余興ではなくて、本興であることを一つ御諒解願いたいと思います。

プログラムにあります哥沢は、大川翁の一番愛誦されておられた「ほととぎす」でございますが、この唄を唄います佐橋章子さん、この方は元下谷の「つやぎく」さんという芸名で、お若い頃に、大川先生に大変可愛いがられた方でございます。下谷の名妓としてうたわれた「おやえ」さんという人があつたそうですか、その「おやえ」さんの本名が佐橋章子で、その芸風と申しますと、芸道を襲名なさいまして、只今小唄の家元をなさつておる方でございます。皆様の中にも多分御縁故のある方が多いのではないかと存じます。次ぎに斉木ふささんでございますが、この方も矢張りもと下谷の「めとら」さんという芸名で出ておりました方でございます。又四番目の小唄ぶり、この舞踊の方をやつていただく方は、田辺さんの御縁故の方で、三共の高峯さんの御夫人だそうでございます。それから唄います方は、皆様も既に御承知の通り御名前が浩子さんとなつておりますが、これは芸の方のお名前かも知れません。田辺武次さんの令夫人でございます。次ぎに浅居丸留子さん、この方は有名な声楽家でございますが、矢張り大川さんに多年御愛顧をいただいた方でございます。次ぎの丸香さんは、浅居さんの御弟子さんだそうでござ

います。それから最後の手品は、矢張り埼玉県人で安部さん、大変風変りなんですが、安部高等学校の校長さんでございます。校長さんの方よりも、この手品の方が、天下に大変有名なそうでありまして、テレビ其他にも始終出演される、又両陛下の御前披露もなさつたというお話でございます。

尚最後に付加えさせて頂きますが、小唄振りの題名「助六」は、河上溪介氏の作でございます。河上溪介氏は小唄の新作、殊に芝居物の作詞で斯界に有名でありますが、この方が何んと大川義雄さんであります。唯今大川鉄雄さんから、本日の催しに一番残念だといわれました通り既に先年故人になられ、これはその遺品でありますが、芸道の大川先生の血のつながりも亦た不思議なものと存じます。

こういつたような訳で、皆さん夫々深い因縁を持つておられる方々でございます。どうぞその積りで御観覧を願いたいと存じます。

附一　大川先生二十三回忌敬慕会（昭和三十三年十二月六日）

奉盃

司会者

ただいま名誉会長さんから御懇篤なるお言葉をいただきまして、まことにありがとうございました。これから盃をあげていただくことになるのでございますが、今日お手元に御試飲いただくのはタカラビールでございます。実は桜影会の会員数名の者が宝酒造株式会社にお世話になつており、またある者は傘下の仕事をさせていただいておるわけでございまして、育英、桜影会の幹部の方々の御了解のもとに、今日は一つタカラビールを御試飲していただくという趣向になつたわけであります。新製品でございますが、非常に味がよいということでございます。ぜひ今後はタカラビールを御愛飲願いたい、こういう次第でございます。よろしくお願いいたします。

盃をあげる前に一言お願い申し上げます。大川先生はどうもドライであつたように思うのであります。つきましては大川先生の乾盃と言つてはどうかと思ひまして、一つ今日はうまい言葉を工夫いたしまして、奉盃ということになつたのであります。その中で一番許可書をいただいておるのが田辺先生のやうでありますので、一つ田辺先生に奉盃なるものの音頭をとつていただきたいと思います。

名誉会員　本州製紙会長　田辺武次氏

私は非常なお墨付の酒飲みだというお話でございますが、大川門下には名義上は酒飲みがおりませんが、実際は非常に多士済々あるのであります。ここに御列席の賛助会員の中にも上戸の会員がおられますが、タカラビールを飲むにつきまして、私の思い出を申し上げるのは、お墨付だというような

誤解をこうむつたというエピソードがございますから、私は大川育英会出身の中に御披露申し上げますが、大正の震災の時でございます。まだ先生が向島においでになりましたその前でございます。ちようどその時は浅草橋まで円太郎のちよつと変つたバスがございまして、あすこから歩きまして吾妻橋を渡り、左に向島土堤を歩きまして、先生のお宅に入つたのであります。吾妻橋を渡りますと、あそこに日本ビールのビヤホールがあります。これは非常にその当時の東京のビール党に歓迎されまして、吾妻橋を渡ると、坂をだらだらと下りまして、向うを見るとビールがジョッキに盛りになつておる。そこで傾けまして歩いて家へ帰りますと、顔がぽうつと赤くなりますけれども、歩いたので赤くなつたと大川先生の御夫人なり家の女手をごまかしまして、いい気持でもつて夏を過ごしたのでございます。ところが一日急に先生がお帰りになりまして、私に出て来いという御命令ですから、私もしようがない。いかにしてこれをさましたらよいかと考えて、水ぶろに入りましたが、なお赤くなつてしまつた。しようがないものですから赤いまま出ました。何だお前の顔は……ということで、いやいやながら白状したのが、私がお墨付ということになつたのであります。私が今日先生の前で頂戴するのは、これでヘソの緒切つて二度目でございます。どうか一つ先生の奉盃をお願いいたします。

理事　王子製紙嘱託　伊藤憲助氏

皆さんの会の結成について、池田会長から今日までいろいろと御相談に預かつて参りましたが、今日の会合がかように盛大に行われたことは、まことに御同慶にたえないのでございます。

この桜影会の会員の方には、大川先生にお目にかかつたことのない方も多数あるということでありまして、もちろんお目にかかつて言葉などを頂戴したことのある方は、きわめて少いそうでございます。そこで皆さんの御希望で、先輩各位から大川先生に接して得たところのいろいろの感想なり、あるいは自分でお考えになつたことを皆さんを通じて知りたい、こういう御希望がございますので、追憶談を賛助会員の方々からやつていただきたいという皆さんの御希望なのでございます。それでいろいろ皆さんにもお願いするのでありますが、しかしまあ、とつさのことでもありますし、皆さんをお名指し申し上げたり、あるいはここに出ていただくというのも、心ないことでありますので、まあ隗より始めよということもございまして、私が前座をつとめることを御承認願いたいと存じます。

今大川先生の御霊に向つて皆さんで盃を奉つたということは、私どもは実に矛盾を感ずるのであります。ことに私など

はほとんどお仕えした十八年間、毎年一度ぐらいは酒についてお小言を頂戴しないことはなかつたのであります。先生はむしろ酒を好まないというよりは、酒をにくむということの方が当つて居る様であります――十八年の間何回も宴席の末席を汚しましたが、先生は一滴も上らない。たまになめた程度で顔をまつ赤にしておる。それでほとんど連日宴会をしておられたのでありますが、お前たちは宴席に事よせて酒を自分で飲むのだ、おれは毎日宴会をしても酒を飲まずに勤まるのだということを始終言われたのであります。そこで宴席に出ますと、やはり酒を飲まずに自分で、御承知でもありましようが、歌沢を一、二席おやりになる。そこで緊張した座敷を自分で解いて、皆さんに出ていただく。ごくやわらかな空気にして、それを芸者やなんかに渡す、そういうふうな宴席のとり方をしておられました。

私は今酒の話からだんだん思ひ付いて参つたのでありますが、ある人の事でありますが、酒のためにせつかくの仕事をやめなければいかん、あるいはこの男を仕立ててやろうと思つておつても酒のためにやめてしまつた。つまり自分は酒をにくむのじやないけれども、酒のためにやりそこなうからやめろと言うのだとの事です。これはわれわれの大先輩でありますが、故人となられたのでお名前を申し上げますが、新井要之助さんと云ふ方がおりました。中津川の工場長の時です。それは非常に謹直なつつしみ深い方なんですが、たまたま一夕召しあがられた。必ずおばあさんが電報が来ると、水と一緒に枕元に置くわけです。ところがその時はよほど召し上つたものと見えて、電報が目に入らなかつた。ところが明くる朝になると大川さんは東京から中津川に来ておる。非常にあわてました。酒の上ではあの新井さんもこういうやりそこないがある。それだからお前等若い者は酒はやめなさいというのであると、戒めて居られ、酒に対して非常に謹慎を命ぜられたのであります。又非常に酒を飲んだからということで会社から離れた方もあり、またおわびがかなつて出て来た方もあります。こういう方がありました。二度ぐらいやりそこなつて、三度ぐらい先生の所に参つたのでありますが、先生はその方にお前は今度は酒を飲んだらいけないぞ、しかし人間のおれと約束したのではとてもお前は守れないから、成田の不動様と約束して来い、そうしたらもう一ぺん使つてやる、と云ふ事で成田の不動様のお札をもらつて樺太に赴任したという若い人があつたのであります。片方において非常に厳格に、辛厳におやりになるのでありますが、一方に何か非常にユーモラスなことがたくさんあつたのであります。

今田辺さんがおつしやつたのですが、私も一、二度だけ先生から酒を飲むことのお許しを受け、むしろ酒を飲むためにその日はお仕えしたという話が二つあるのです。一つは平沼亮三さんが樺太においでになつた。平沼亮三さんはウイスキーを盛んに召し上る。そこでその日のお接待に、先生は「田

幡も居りますがどうもあなたのお酒の相手ができない。私の所であなたと太刀打ちできるのは、これだけです」と私を指して、これと一緒にどうぞお過ごし下さい、それでウイスキーの上等なものをいただいて、平沼亮三さんと一献を傾けたことがございます。もう一ぺんは長いお病気からお平癒になつて大宴会をやられた。その日はそれこそほんとうにお許しを得て非常に飲んだ。酒の話が始まつたので私もつい釣り込まれて酒の話になりますが、そういうようなわけで非常に物事を考えるのに、一方は非常に厳格であります。その当時は私ども若いので慎しみ深くしておつたのでありますが、だんだん年を取るに従つて横着になりまして、公然と飲むようになつたのでありますが、大川さんは私と会食をする時は酒だけは勘忍してくれと御自分で了解を求めて、皆さんと会食をなさつた。ただ一つ例外があります。中之島製紙の馬場金太郎という老年の方が樺太に参りました。例によつて酒なしのテーブルでした。ところがテーブル・マスターが、大川さんは馬場君だけは許してやろう、馬場君は酒がなければ食事がのどに通らないから、二本だけは馬場さんに上げろということで、馬場さんにだけ酒を上げた。そういうような、何と言いますか、非常に物事を考えるのに普段と反対のことがしばしばあるように私どもは考えております。

どうも社長は大へんきびし過ぎるじやないか、少し残酷じやないかと考えた事もありましたが、それがだんだんとわかつて参りまして、物事を考えるのに幅がある。都合のよい時には右足が片方に入る、都合の悪い時には左足が入るということがありましたけれども、ただ一様にわれわれを厳格にすることばかり求めていなかつた。事業上のことをいろいろ考えましても、常に幅を持たれておつた。仕事の上でもそうです。すぐその時に従つて直ちに説を曲げる、一向平気です。一方から見ますと変節のようなこともありますけれども、非常に幅を持つた考えを常に持つておられた。私は若い時はでたらめだと思つたことがありますが、ただ一生を通じて考えて見ますと、ある一貫したことがあるように思つております。いろいろ思い出は一時間や二時間私がしやべつても尽きないほどあるのでありますが、それは割愛いたしまして、どなたかにまた話していただきたいと存じます。

ついでに申し上げますが、私は大正四年の十月に先生のもとに参りまして、ずつと今日までお傍に参つたわけでありますが、こうして考えて見ると、下村さんあるいは大川理作さんなどは明治三十六年に入つた。皆さんお生れにならない時です。そういうような古い時からおられる方がたくさんあります。私は大正四年ですが、あそこに小野田政栄さんがおられますが、おそらく大正三年から大川さんのもとにおられる。もつとも斎藤さんは赤ん坊の時に大川さんにお目にかかつておるから、ことによると大川さんと一番長くつき合つておつたのは斎藤さんかと思いますが、いかがですか。そうい

うふうで大川さんと長くお目にかかつておる方がたくさんあるのでありますから、皆さんと会を重ねるごとに、そういうことでいろいろお話を承わることは大へん結構だと思います。

私はこれで前座を終らしていただきまして、次にどなたか賛助会員の方からお願いいたしたいと存じます。斎藤さん如何でございますか。

賛助会員　北日本製紙社長　斎藤　孝氏

ただいま伊藤さんから紹介がありましたように、私は、もう廃止になりましたが、元の王子製紙の気田工場の社宅で明治二十九年に生れました。私の父は大川先生と同郷同村で、四十数年大川さんについて製紙をやつておつたものでございます。大正九年に、たしか中津工場の建設の済んだ後、二、三年でやめました。大正十一年に私は学校を出ましたが、御承知のように大正十一年は非常に就職難の時代で、学校は出ましたけれど、とても就職できないのです。それじやお前ついて来いというので、向島の大川邸に参りまして、お願いいたしましたところ、直ちに採用されました。ただしすぐ樺太の真岡に行けといわれました。当時学校を出た者はあまり樺太なんかに行くことを好まないのであります。私は就職ができたのですから喜び勇んで樺太に参りました。ここにいらつしやる下村さんの工場長の時代でございます。真岡に参りまして爾来樺太に二十三年おりましたものですから、本社に少しもおりませんで、先生の謦咳に接することは、毎年先生が工場に夏御視察に出る時だけであります。ただ追憶といたしましては、しかられたの一言に尽きるのであります。今名誉会長からお話がありましたし、田辺さん、伊藤さんからお話がありましたが、私がしかられやすかつたのか、耳を引つ張られてしかられたこともございます。また酒の上では懇々としかられて、私も飲みましたものですから、当時下村工場長を証人に置かれて、爾今酒を絶対にやめろといわれました。下村さんは「斎藤は近頃少しも飲みません」とうまいことをおつしやつて下さいました。実際は飲んでおりましたが、下村さんのおかげで命がつながつて、今日あるものと思つております。

ただ私は非常に先生に敬服いたしましたことは、常に工場に参りますと菜つ葉服に着換えて、工場の隅から隅までお歩きになる。私はまだ学校を出て二、三年の時分ですが、今は非常に技術が進歩しておりますから、そういうことはないのですけれども、当時サルファイト法ですと直接蒸煮やつておりますから、水温が上つて参りますと化合酸がふえちやつて、夏になると二割ないし三割の減産になる。結局水温を下げるということは、当時の技術ではなかなかむずかしかつたのですけれども、石灰石とガスと水との接触を避けさえすれ

ばよいのじやないか、石灰石の代りに御影石を入れてやろうじやないかというので、御影石を買つて入れて、真岡工場だけはその夏は化合酸が少くて、減産もしなくて済んでおつた。ところが社長がおまわりになつて、どうしてここは減産しないで済むのかというお問いに対して、実はこれこれこうだと述べました。なぜ社長にそういうことを報告しないかと言つて、懇々と私はしかられました。たつた一度ほめられたのがそれだけであります。しかられると同時にほめられまして、そういうことがあつた時には社長に報告しろ、まさか工場長をおいて社長に報告することはいけないので、工場長だけには報告したと思うけれども、社長には報告申し上げなかつたのです。

そういうふうに工場の隅々まで常におまわりになつておる。気を配られて、下々の者の考えまでもお聞きになつた。これは私に対しまして非常に教訓になりまして、私も今北日本製紙の社長をしておりますが、一月おきぐらいに工場に参りますが、先生のまねをいたしまして、菜ッ葉服に着換えてその都度工場をまわつております。これは一つ先生のおかげだと私は深く感銘しておる次第であります。いささか私の思い出を述べまして、これで御挨拶といたさせていただきます。（拍手）

賛助会員　市川毛織社長　木下静一郎氏

元紙屋でございましたが、その後紙会社がお得意であります フェルト会社をやつております木下でございます。

たくさんのお方がお集まりのうち二番目に御指名いただきまして恐縮なんでございますが、私は、今斎藤さんのおつしやつた通り、ほとんど三十年ほど工場ばかり歩いておりましたので、あまり側近にはせる機会がございませんので、これと言つて皆さんに申し上げる珍しい追憶談がないのであります。しかしかえつて、たまに年に一回か二回工場においでになつたり、また私どもがたまたま東京に出ました時に御挨拶を申し上げるというような機会に、いろいろと教えられるところがたくさんございます。かえつてしよつちゆうお会いになつて慢性になつておる方よりも、あるいは私どもの方があとまでよくしみ入つておるかとも思われるのであります。

私は最初に富士製紙に入社いたしました当時、たしか社長が小野金六さんという方で、非常に御年配で、ほとんど会社にはお出ましがないようなことであります。従いましてその次がたしか大川社長と思うのであります。従つて私が学校を出まして、事業会社の社長だと思つたのは、大川社長が初めての印象なんです。先ほど斎藤さんがお話になりましたが、全く私は今でも感心しておりますが、故大川社長は仕事の鬼

と申してよいのじやないか。年に一、二回工場においでになりますと、朝から夜は十時ごろまで仕事また仕事です。全くお休みの時あるいは食事の時だけ気楽にされるだけで、あとはほとんど仕事の話であります。斎藤さんはさつき非常に小言ばかり食つておるというお話でありましたが、私は工場の中で事務主任でございましたから、仕事の上でお小言を頂戴する機会が非常に少なかつた。その代りに現場をおまわりになる時には、先ほどおつしやつた通り作業服一枚、そうしてわれわれ若い者が見ておつてもほんとうに危険だと思うような地下室でもどんどん下りて入られる。そうして何か気がつくと、工場長をいきなりつかまえてしかり飛ばす。何か諄々とお小言なのでありましよう。私は見ておりましたが、その時は実に眼光烱々として、また実に真摯な態度で、はたに人がいようがいなかろうが、全く何と申しますか機械と自分と一緒になつてしまつたというような態度である。まことに私も敬服したのであります。ただその時に、まわつて歩かれる間、作業服の上衣をいつも脱いで私に持たせるわけです。もう一つ懐ろから皮の財布のような何か部厚なものを出されて、これは大切なものだよ、なくしてはいかんぞ、しつかり預かれ、こういう話がいつもありました。実は中を見たかつたのですが見なかつたのですけれども、いつもしつかり保管して置けと言われて、作業服と財布をすつかり重ねまして、二時間でも三時間でも、仕事しておる間こつちは立つて見ていなければならない。それがかえつてお小言を食う時よりも辛かつたような感じがするのです。ごらんになりまして、ちよつと休みたいという時に、テンダーが一服する休憩室に入られる。そうすると今まで機械で夢中だつたのですが、今度はまるきりがらつと変られる。その時私どもは七つ道具と申しておつたのですが、手をふくためのタオルを出さなければならない。またすぐ葉巻を出さなければならない。すぐマッチで点火しなければならない。いわゆる七つ道具みたいなものをしよつちゆうポケット一ぱいに入れて、いつでも御用に立てるように用意しておくということが私の役目だつた。また一たびクラブに帰られますとがらつと変つて、かゆい所に手が届くようにお世話申し上げないとごきげんが悪い。それは亡くなつた田幡さんがそういうふうに仕向けたのじやないかと言つておつたのですが、とにかくそれをしないと、どうもごきげんが悪い。食事が済めばすぐうがい、その次には何を出す。私は給仕人と目くばせしたり、あるいは野球のサインのように指一本出したら何を出す、二本出したら何を出すというようなことだつた。実はそれで非常にごきげんがよかつた。今の若い人にそういうことをしやべつたら、そんなばかなことがあるのかと言われるだろうと思いますが、私は今考えて見て、これはいい修業をしたと思つた。反感とか何かはなくて、そういう修業をさせられたことが、非常に自分のためになつたと思つております。

王子製紙と合併になりまして、藤原さん、高島さんというような歴代の社長が地方へまわつて来られる。初めは藤原さんあたりはちよつと変つておられて、今の大川式にやるとちよつとごきげんが悪かつたのです。（録音中断）

北海道に宮様がこられたとき、宮様にどういうものを差し上げたらよいかということでいろいろ協議しまして、私も今考えて見て、気のきいたお弁当を作つたのであります。私は宮様の分を持ちまして、あと随行の方には社長以下の弁当と同様のものを作りまして岩見沢まで行つた。その時ボーイにどうだつたかと聞きましたところが、非常にお喜びで、ほとんどきれいに近いほど上られた。これは非常に嬉しかつた。その晩着きましたところが、全部呼べということで、参りますと、ここに弁当があるからこれを見ておけ、前に作つた弁当はほとんど宮様がはしをつけられなかつた。ところがこれはほとんど上られた、お前ら見ておけということで、実はこつちはおほめになつたのですが、向うはしかられて、はなはだ気の毒に思つた。これらのことも大川さんのやかましいことに対する気の配りということの結果が、そういうようないい結果を見たと思うわけであります。

もう一つ、大川社長が仕事の鬼であると同時にいろいろな仕事をやつておられることはわかつておりますが、製紙関係のことに一番興味を持つておられる。これに重点を持つていらつしやるのじやないかと思うのです。その例といたしまして、私は年末に地方から上京いたしまして、今の大川邸へ行つた。そこへ関係会社の幹部を集めまして、年末の訓辞をされたわけであります。聞いておりますと、初めからしまいまで紙の話であります。集まつた人は電力会社、銀行の人もあり、関係会社の幹部が見えておるのですが、紙の話ばかり、私は興味を持つて聞いたのですが、ほかの人ははなはだおもしろくなかつたと存じます。大川先生はそんなことは平気なんで、ほかの気持なんかお考えにならない。自信満々とやつておられる。ところが田中さんが立ち上りまして、今大川社長が話されたことは紙の話が多かつたが、自分らに関係があるからさように一つ御了解していただきたいというようなことを言つた。大川さんは自分のお話だけで、人の気持なんか考えないのです。（録音中断）

私は会社に入りまして七年目に、事務主任心得ということになつたのであります。これは何でもあとで聞きますと、大川先生と当時の工場長とだいぶ議論があつたらしいのであります。まだ若いから少し早いとか、いろいろあつたらしいのでありますが、飯田さんが非常に説得されたということであります。これは私の何と言いますか、世の中へ出る一つの歩みのきつかけになつたと思う。今から考えるのに、もしその時にそうでなかつたとしたら今どんなような関係に変つたかということを、つくづく考えるわけであります。

もう一つ、私は大川社長――現在の大川社長ですね。……意見が違つてどうにもならないから、だれかそういう場合の相談相手になつてくれる方をお願いしなければならないというので、思いついたある先輩からのアドバイスもありまして、大川さんの所にお願いに参つたわけです。その後社長から御助けをいただいておるようなわけであります。それからその隣りにすわつておられる迫本君は……なかなか大川社長とはおつながりがございます。今日こうした催しがあります時に、いろいろ昔のことを思い出しまして、また二十三回忌にこういつた機会を作つていただいたことを非常に喜ばしく存じておる次第であります。まあいろいろお話がございますが、とりとめのないことを申し上げまして、私の責めをふさぎます。（拍手）

賛助会員　大機工業社長　金子　三明氏

私は学校を卒業したのが大正七年十月末です。そういう関係で大正七年の十一月にすぐ上京しまして、当時の樺太工業、ここに御臨席になつております高梨さんの引立てによりまして、大川社長のもとにお世話になつた次第でございます。それで大正八年に樺太にすぐ赴任いたしまして、爾来ずつと泊居工場におつたのでございます。そういうわけで東京にあまりおりませんので、大川先生の日常に接する機会がごく少いのでありますけれども、これはどうも何だか自慢話のようになりますけれども、年齢三十の時に泊居工場長を任命されまして、当時若い工場長ということで異例の任命を受けたのであります。これは決して私がやり手とか何とかいうことではありませんので、ちようどまわり合せがそういうふうになつたのではありますけれども、とにかく特別のお引立を受けた人間の一人であると思つて感謝しておるわけでございます。

思い出としては二、三ございますが、この席で申し上げるようなことといたしましては、大体公けの御接触でありますので、仕事のことが多いのでありますけれども、仕事には今まで皆さんお話になりましたように、とにかくなかなかやかましい、おつかない人であります。ただしその一面に非常に人情のある取扱いをされるというような点がありまして、その辺も一、二話してみたいと思います。

ちようど大正八年と申しますと、第一次大戦のちよつと後でありまして、まだ非常に景気のよい時でありました。そういう関係で赴任早々工場の木釜とかボイラーとか一部増設工事があつたわけであります。私は学校は元々電気の出身でありまして、当時電気屋をやつていたわけですが、それもまだ学校出たてのホヤホヤで、まだ責任のある位置ではありません。ちようどその年かあるいは翌年かはつきりいたしませんけれども、夏やはり樺太の各工場を巡視にお見えになりまし

て、その後増設についての設計や設備を見せろというわけで、工場長の机に関係者を呼ばれまして、私は電気の方で関係はないのでありますけれども、ボイラーのことだからお前も出ろというわけでその席に出たのであります。そのボイラーの増設に、従来のボイラーは、いささか専門的になりますけれども、外国のボイラーがずつと座つておりまして、ストーカーの所にちようど中ぐらいの葉巻みたいなものがありまして、まずトロッコで石炭をそこに引き上げて、それでストーカーへ石炭を落す。灰は一度水をかけまして、これを引き出しまして、またトロで外へ運び出す、こういう設備になつておるのであります。そこで今度新しくしますボイラーは今までと違いまして、ちよつと珍しいボイラーであります。アメリカのエリシチー鉄工所の縦型の水管式ボイラーで、ほかのに比較しますと、背が高いボイラーであります。石炭は従来通りの高さで供給しますと、灰の出るのはどうしても地面の中に十四、五尺も下に下げて、それを上げなければならぬ、こういうような設備になるわけでありまして、この設計図面を出して、盛んに設計や工作の関係者が説明しておるのでありますけれども、大川社長はどうしてももう少し石炭を高く上げて、灰を裏から出すようにしたらよいじやないかという説を主張しておりまして、設計陣はなはだ旗色が悪いわけであります。それで、私は関係はありませんけれども、助太刀を出したわけです。社長そうおつしやいますけれども、灰は石炭の十分の一にもなりません。その十倍以上の石炭を高く持ち上げるのは大へんな苦労で、十分の一以下の少い量になつた灰を下からエレベターで持ち上げる方が、動力においてもすこぶる楽ではありませんか。そういうことを申し上げた。そうしたら、なるほどお前の言うのも理屈だ、それじや原案通り許可する、こういうことで無事に原案が通つたわけであります。この時に、あの小僧はとにらみつけられたので、射すくめられたような気がいたしましたけれども、とにかく理屈にかなつたことを申し上げればこれを取り上げられるということで、その時に自信を得まして、それから以後はずいぶん社長が言われることと違いがあつても、堂々と理屈を述べて許可を得た、こういうことがあるのであります。これはどちらかと言えば、ほめられた方の場合でありましようが、しかられたことも一度ございます。

われわれの時代は、あまりそう猛烈なお小言は少なかつたのでありますけれども、二度ばかり怒られたことがございます。今までのこともこれは忘れないのでございますが、最初に怒られたのは、はなはだ恥を申し上げるようでありますが、当時工場の幹部の者の排斥問題が起つたのであります。ほかの連中が同盟して、ある一人の人の排斥をやつた。私はこの人とも至極懇意であるし、別に排斥しなければならぬということは考えていなかつたのでありますけれども、どうも大勢でやるので、とうとうその中に加担したわけでありま

す。社長が樺太に見えまして、この問題について一人々々呼ばれまして、その意見、事情を聞かれたのであります。この時に私は、別にどうということはないけれども、もちろんその中に加盟したのでありますからやむを得ない、ただし会社に対してとか、あるいは社長に対して不満を持つてどうこうということは決してございませんから、その点は御了承いただきたいと申し上げたのですが、その時には大へんしかられました。少くとも技術屋が、技術をもつて立とうという人間が、人の排斥だの何だのそういう中に加担するのはけしからん、今後そういうことを絶対やめろ、まことに申訳ありません、今後絶対そういうことはいたしませんと大いにあやまつたのでありますが、あまりひどく怒られましたので、あとであやまつた。そこで晩餐の席に末席を汚しておる社員でありますけれども、晩餐の席に特に呼ばれまして、ちようどその時には奥様の御同席でありましたけれども、どうもこの問題について金子があやまるものだから堪忍してやつたよという話がありまして、ありがたく晩餐を頂戴したわけであります。

もう一つは、工場長になりましてからのことでございますが、やはり奥様と御一緒にお嬢様が樺太に見えまして、私どもは社長と一緒に工場をまわつておつたので知らなかつたのでありますけれども、若い事務所の連中がお昼休みにお嬢さんを引つ張り出してテニスをやつた。大川先生はとにかく酒と運動がきらいだつたわけです。お嬢さんは今ここにおられます田辺さんの奥さんでありますが、運悪くテニスをやつた時にすべつて転ばれてすりむいた。それが目にとまりまして、どういうわけか、テニスをやつてすりむいた、そうしますとその翌日でありましたか、最後に一同を集めて訓辞をたれた時に、工場長、この工場ではテニスをやつておる人間がいるな——私はそのおけがされたということを知らなかつた——ところでやりませんとは言えないから、若い連中がやつておるようです。こう申しますと、以後テニスを絶対禁止する、よろしいか、それでとうとう承知いたしました、眷々服膺いたしまして、以後禁止いたします、どうぞ御勘弁願いますと申し上げて、お許しを得たわけであります。

怒られたのは二度しか記憶がございません。ただし怒られますと、必ずあとで一つ今晩一緒に飯を食おうというふうになだめられる。そういう点においては非に人情の深い方であります。いわゆる仕事に対しては非常に厳格であるけれども、そういう時にはそうではなかつた。

もう一つ、酒の話がよく出ますので申し上げますと、私はどちらかと言えば相当酒が強い方だつたのです。ただし大川社長の前では、宴会に行つても酒は一切飲まなかつたのです。おい、金子どうだい、お前酒を飲むかという話だつたから、いや飲みません、そうしたら飲まないのか飲めないのか、こう反問を受けましたから、飲めますけれども飲まない

のですと申し上げた。そしたら、よろしい、酒を飲んではいかんぞ、こういうことだつたのです。ところがあとで、亡くなられましたけれども鈴木実さんという重役がおられましたが、君はうまいことを言つたな、飲めるのだけれども飲まないのです、自制しておるのです、こう申し上げたのですけれども、うまいことを言つたなということがありました。そういうふうに酒はおきらい、酒と運動はおきらいだつたわけです。

今の運動の話は、社長の前でテニスを禁止されましたけれども、その後どうします、こういうわけだから、勤務時間中はたとえ昼休みでも困るけれども、うちへ帰つてからテニスを禁止するわけにいかんから、そこはどうも仕方がないということだつたわけです。

一向つまらぬお話でございますが、そういう点が特に印象に残つておるわけでございます。追憶の一部として申し上げた次第でございます。（拍手）

賛助会員　白川パルプ工業営業部長　大石　敬事氏

大川先生の彰徳のためにお集りなさつた先輩の方々の中に適任者がたくさんおられると思いますが、ただいま伊藤さんから御指名をいただきましたので、先生の人情に富んだ思い出の一端を御披露いたしまして、皆さんの御参考に供したいと思います。

申し上げるまでもなく、大川先生は明治・大正・昭和を通じてわが国の実業界の傑物であります。それは私ども仕事に携わつております者にとつて、事ある都度その感を深くするのでありますが、最近の代表的な産業になりました紙産業というものは、大川先生によつて実質的に育て上げられた。しかし先生のお仕事は紙産業だけではなくて、それに関連して鉄鋼業とか機械工業とか、あるいは電気、鉄道、海運、セメント、こういう方面の分野にまで及びまして、非常にすぐれた着想と卓越した実行力とは、その後の業界の人を見ましてもなかなかこのような人は少なかつたのじやないかと思われるのであります。ただいま先輩の方々のお話を伺いますと、先生の御性格もお話がございましたが、事業人としてはたしかにこわい方でありましたが、一方先生の御性格に接すると、何と言いますか非常にゆるやかな人情味と言いますか、やわらか味がありまして、非常に性格としてはバラエティに富んだ方であります。

それで先生とは、私の学生時代の二年間と、それから研究の期間を入れて三年間の五、六年の期間しかなかつたために、非常に末輩である私に対して別段おしかりなさらなかつたのじやないかと思います。私が初めて先生に接しましたのは、私が当時在学しておりました早稲田大学に、先生が課外講義に来られたことがございます。一時間半ほどお話になつ

たのでありますが、ああいう大家の申されることでありますから、言われることは一々ごもつともでありまして、何らこれは疑問の余地がなかつたのであります。当時私は元気だつたものですから、講演の終つた後に先生に質問をいたしたわけであります。ところが先生が、ここに一万人もの学生諸君が入つておつて、元気なようであるから質問があると思いますが、それに一々答えておつては応接にいとまがない、質問事項があるならば手紙でよこしてもらいたい、こういう御返事でありましたので、私は質問を打ち切りまして、うちに帰りまして大川先生に質問要項の手紙を書いたのであります。書いておる最中に私の兄が私の書斎に入つて参りまして、どこへ手紙を書いておるのかと申しましたので、大川先生に手紙を差し上げるために書いておるのだと申したところが、大川さんのごとき大物がお前らの書いた手紙をごらんになるものかと言うものですから、それじやごらんにならないような手紙を書いてもしようがないと思いまして、そのまま机の引出しに放り込んでおいた。一ヵ月ぐらいたちまして書斎の整理をした時にその手紙が出て参りましたので、それを読んで見ますと、自分で書きながらどうもおもしろい。読む読まんは大川先生のお勝手であつて、こつちは三銭切手をはつて出せば用事が済むと思つて、手紙を投函したのであります。三、四日たつて朝新聞をとりに行つたところが、大川平三郎という封筒が入つておるのであります。大川さんから御返事があつたのだなと思つて、手紙を拝見しましたところが、中に書いてある文面は、過日早稲田大学の講堂における講演を非常に熱心な態度で謹聴したことが、文面にみなぎつておる、君のごとき青年ならば先生多忙であるが会見することを喜ぶ、こういう内容のことが書いてございました。それは私がちようど大学の一年の時でありましたのが、大川さんのような偉い方に一人でお目にかかりに行くのも恐縮だと思いまして、同行を二、三人連れて行つた方が気が楽だというので、学友に電話をかけて誘つて見たのでありますが、ちようど夏休みにかかる前で、大部分の学生が帰郷を急ぎまして東京を引き揚げるころだつたのであります。その返事は、わざわざ大川さんに伺つて汗をかくのはいやだ、こういうことでありましたので、やむを得ず私は一人で大川さんのお宅に参上したわけであります。ところで大川さんの所に参上するまでにいろいろ研究して見ますと、夜はかなり遅くまで仕事をなさる関係上、朝はゆつくりなさるということを伺つておつたのであります。しかし来客が多いことだから、なるべく朝早く伺つた方がよいと思いまして、朝の八時ごろ滝野川の本邸に参上したのであります。参上した時はお目覚めになつておりませんので、執事の方に来意を告げまして、応接間にお通しをいただきまして待つておつたのであります。そこへしばらくたつてから大川さんがお見えになりまして、いの一番にお聞きになりましたことは、君は一体何の学問をしておる

かという御質問であります。そこで私は経済学を勉強しておりますと答えたところが、大川さんが言われるには、経済学は部長か少くとも重役クラスにならないと役に立たない、君は経済学を勉強する前に、まず物理や化学を勉強すべきであつた、物理や化学というものは、甲の原因に対して甲の結果を来たし、乙の原因に対して乙の結果を来たす、すなわち因果の法則を教えるのが物理化学である、これは人生の理法を教えるものである、それを学ばずして経済学を学んだことは、君の第一の失敗だと言われるのであります。そこで私は返事に窮しまして、私は経済学を学び始めたのでありますが、一体どうすればよろしいかと言いましたら、大川先生は、学んだものは仕方がない、やつて行け（笑）こういう返事であつたのであります。それで君は将来どういう方面につくか知らんが、今のうちから将来志すところを勉強して置けと申されまして、十五分間ぐらいその日はお目にかかつたのであります。

それから二年ほど経過して、今度は私の方に欲が出て参りました。昭和五、六年は井上準之助さんが大蔵大臣で、金解禁前後のころで、非常に不況な時代でありました。この二、三年も不況ではありますが、当時のものにくらべそう深刻なものではないと思われるのであります。当時はどこへ行つても人は要らん、整理するが採用はしない、こういうようなことであつたのであります。（録音中断）

大川さんの話を伺おうじやないかという話が友人の間から起りまして、そこで私は大川さんに手紙を差し上げまして、一ぺんお目にかかりたいということをお願いしたのであります。お忘れになつたかと思いましたが大川さんは覚えていて下さつて、すぐまた御返事をいただきまして、今非常に忙しいが、十一月の二十八日に滝野川の本邸の方に来てもらいたい、それは大川さんとしては非常に事業上の多忙な時でありまして、今考えて見ますと、よくあの多忙な時期に私どもに会つて下さる余裕がおありになつたと感心しておるのでありますが、ただその時に非常に忙しいから、あるいはそれがだめになるかもわからんが、その前の日に秘書に電話してから来てもらいたいということでありました。その前日秘書の方に問い合せて御都合を伺いましたら、明日午前十時にお目にかかると思うからおいで下さい、こういうことで明くる日午前十時に二、三人の友人を同行いたしまして参上したのです。申し忘れましたが、その御返事の手紙にこういうことが書いてありました。二、三の友人を同行することはよろしい、ただしかし徒らに事業を解せざるやからはごめんこうむりたく候、事業を解せざるやからのために時を費やすことは、時の浪費なればなりという文句があつたのであります。さすがに事業家は合理的だと思つて感心しておつたのであります。そういうことで友人を同行して滝野川の方に参上いたしましたが、ごきげんがよくて一時間半ほどいろいろと教訓

をして下さつた。そのお話が今でも私の脳裏に残つておるのであります。忌憚なくその当時のことを回想させていただきますと、とにかくあの忙しい実業家がどこでああいうことを勉強されるかと思うほど、たとえば経済学なら経済学の話になりますと、大学の経済学部の教授が講壇で講義をするような内容を淡々と話される。たとえばアダムスミスの富国論はどうであるか、あるいはだれだれの経済原理はこういうことを言つておる、非常に興味深く拝聴したのでありますが、迂闊な質問をいたしまして、先生はそういうことをどこで勉強されましたかと伺つたところが、僕は正規な学問は受けていない、君らのように学校というものは卒業しないのだから、原書で経済学を読んで勉強した。君らは翻訳ばかり読むから頭に入らぬが、一言一句読んだから頭に入つておるのだ、その理論が非常に適切で驚嘆いたしたのであります。その当時のお話で、君らカールマルクスの唯物史観を金科玉条として使つておるかもしらんが、そういうものじやない。われわれのやつておることはマルクスの理論とは違うのだ、大川は事業をやる場合に、資本がなかつたら事業はできない。大川先生は明治初年にアメリカの会社に一年間ほど遊学なさつて、当時の話もなさつたのですが、遊学して七百円ほど金を残して帰つた。留学の任務を終つてどうして七百円残して帰られましたかと伺つたところが、アメリカに一年半おる間に一晩もホテルに泊つたことがない。領事館に頼んで、下宿を探して泊つて歩いた。将来自分の事業をやろうということであつたが、その頃ご自分の弟の田中栄八郎先生が大阪に行つてチフスになつた。そこで僕は七百円の貯蓄を持つて大阪にかけつけて、田中のチフスを治すために七百円は全部使つた。だがしかし今日まで田中に一言も言うていない。田中はおれの顔を見ると、大川はけちんぼうだと言つておるが、当時浅野セメントに尾高さんという方がおられたが、田中に会つたらそれを言つてくれ、決してけちんぼうじやないと……。使うところには使うが、使う必要のないものは使わない、これは大川の主義である、そういうことを言つておられたのを思い出すのであります。

その時いろいろお話が続いたのでありますが、人間には運不運というものはない。大川が運がよいということをもし君ら言うなら大きな間違いだ、どんな人間でも生涯の間に幸運のチャンスというものは一回か二回必ずぶら下る。それをつかまない実行力のない人間が、不運に終るのだ、僕が樺太工業を興す時に、汽車の中である友人に会つた。その友人が言うには、樺太にはパルプ資源が無尽蔵にあるということを聞いたので、東京に帰つて樺太を調査したところが、果してその通りの原木があつたので、すぐ樺太の建設に着手したのだ、こういうことを言つておられました。

それからさつき資本論の話に触れましたが、事業をやる者にとつては、資金のリザーブということが大事だ、今日僕は

七十歳であるが、年一万円の金が年一割で七十年たつと一千二百万円になる。一千二百万円の金を使えるようになれば、事業をやる場合に大きな力になるということを言つておられました。もし君らが将来会社に入つて五十円の月給をもらつて、そのうち二十円を将来にそなえる、こういうようなことを言つておられました。

先生のそういう人生観とか社会観とか、そういうような人柄の話はそれでやめます。

私どもはそのあとで江別工場を参観して驚いたことは、近代の設備がかなり整つておる。製紙の規模というものは大川先生の時代からあまり進んでいないのじやないかと思われるのであります。たとえば工場に参りますと、二百十六インチ、その前は十台の内に七台は百四十二インチ、あとの三台は百四十インチ以下であります。江別工場を拝見したのでありますが、百八十六インチの機械を大川先生は四、五十年前にやつておられる。それから見ると機械という点でも、百四十二インチの機械を製紙工場に使つたということは、大事なことであります。大川先生は五、六十年前に製紙機械を日本に持つて来られたということは、先生の着想力と実行力の鋭い点において、これは再検討しなければならないと思うのであります。これは大川先生によつて今日の繁栄を見たということが言えると思うのであります。

ちよつと静岡に参りまして感じたのでありますが、大昭和製紙社長の斎藤さんと大川先生のお話が出まして、今日製紙工業界でもし銅像を作るとすれば、一番に大川先生の銅像を作らなければならないと言われたのですが、それはもつともだと考えるのであります。

ちよつと先生の半面をここに申し上げたいと思いますが、実に先生はよく勉強されまして、小説というものは人情の機微を描いておつて、非常に勉強になる。ですから若い時代に読んだ向うの小説を貸してやるから読めと言われて、拝借したことがあります。特に海外に留学されたからでありましようが、非常に語学に秀でておられまして、その当時工業倶楽部あたりで英語演説を堂々となさるのは、大川先生と大倉組の勝本さんぐらいであると言われたほど、先生の語学が進んでおります。特に発表される時には、やはり現地で修練されただけに、特に発音だけは非常にきれいな発音をなさるので、敬服したことがございます。

いろいろ申し上げるときりのないことでありますが、厳格の半面においてそういう人情味があつたということを皆さんにおくみとりいただきたいと思います。恐縮でありましたが、皆さんの御参考に供する次第であります。（拍手）

会　員　藤田亀太郎氏

私は昭和四年から昭和十年まで大川育英会に御厄介になり

まして、本日はあらかじめ出席の御返事を申し上げられなかつたので、出席者の名簿から漏れておりますが、藤田亀太郎と申します。先ほど賛助会員の皆さんのお話の中に、育英会の出身者が大川先生に直接言葉をかけていただいたとか、あるいは話をするというような機会を持つたのはだいぶ少いのじやないかこういうお話もありました。私は、たまたま東京帝国大学土木科を卒業いたしまして、フランス政府の招聘留学生としてヨーロッパに留学する時に、大川先生に親しくお目にかかつたことがございます。その時のことが今日に至るまで非常に私の役に立つております。その時のことを一言御披露申し上げたいと存じます。

昭和十年か十一年かはつきりいたしませんが、大川平三郎先生が病気で滝野川の家にお休みになつていた。それは六月か七月ごろだと思います。暑くなつた夏のころでございました。午前十一時ごろでしたか、私は滝野川のお宅の長い坂道をずつと上りまして、右側に請願巡査の家がありまして、それからそこを上つて左側に高級車がずらりと並んでおる。これはいずれ大川先生の関係会社の幹部の方々がおいでになつておられたので、その車だつたと思います。玄関に入りまして案内を乞うたところが、早速どうぞということで、あの玄関を上つて左手に廊下がある。廊下をずつと上ると大川先生の休まれている部屋がある。座ぶとんを持つて来てくれた。無位無官の書生の私が、その座ぶとの上にあぐらをかいた。おじぎをする時にはちやんと座るのがあたりまえでしようが、あぐらをかいておつた。ヨーロッパへ参りますが、先生から一つお言葉をいただきたいというようなことを頼んだのだと思います。先生は床の上に起きながらしやべられたのだろうと思います。諄々と話しておられる間、年配の女中さんがうちわであおいでおる。その時にどなただつたか亡くなられた重役さんが報告に来られた。座ぶとんを出されない。畳の上にきちんと正座して、事務の報告をして帰られた。その方が帰られるとまた話を続けられた。御懇篤な言葉をいただいた。無位無官の書生に座ぶとんを出して、自分の会社の重役が来た時には座ぶとんが出ていないのを見て、当時の大実業家というものはいかに殿様のごときものであつたか、また重役と社長の間というものは、家老と殿様のごときものであつたかということを感じたわけであります。それから廊下がぴかぴか光つておつて、危うく転げかかつた記憶があります。とにかく虚心坦懐によく話を聞いていただけたということは、私は今日に至るまで感じておるところであります。

大川先生の思想というものはどんな形のものであつたか、実際に見てつかみにくい、大きな大川先生というものを感じておるのでありますから、大川先生の薫陶を受けたわれわれが時折こうして集まる機会を持りまして、大いに歓談をし、談論風発いたしまして、家族的になごやかに行きましたならば、地下の大川先生もお喜び下さるであろう、こう確信いた

すのであります。実は本日羽田まで行かなければなりませんので中座をいたしますが、ちよつと御挨拶を申し上げたわけであります。失礼いたしました。（拍手）

追　憶

名誉会長　大川　鉄雄氏

どうも私が何か申し上げることは筋違いかもしれないと思うのですが、皆さんのお話を承わつて、ちよつと私の感じたまた私の小言を食つたことや、またおやじの物の見方というような面について二、三お耳に入れて見たいと思うのは、おやじの小言は非常に手きびしい小言でありましたが、同時にお前こういうことをしてけしからんとか、何とかこれをうまく解決せよというような漠然たる小言というものは非常に少くて、小言は非常に具体的でした。これは長年の勘から来るのです。これは私自身が体験したのではありませんが、九州の坂本工場に私がおりました大正末年にはよく言われた話なんですが、ある時木釜の低圧のファンがどうもガスの工合が悪いというようなことから、ファンのプーリーを小さくして回転を上げるという方法をとつたが、どうも実際のファンの回転が一こう上らない、やたらにベルトが痛むという状態になつたことがあるらしい。そこでおやじがやつて来て、その担当者をつかまえていわく、お前こんなに機械が悲鳴をあげておる、それがわからんか、回転はここで一割五分落せというようなことを言つて、後にはファンを大きくしたわけでありますが、とにかく幾ら幾らどうせよということを具体的に非常に正確な数字を持つて来られる。それをやつて見てまだなかなかうまく行きませんと、しからばこうせよということで、抽象的な小言ではない。それだけに聞く方は非常に身にしみる。

それから今の機械が悲鳴をあげておるのがわからんか、よくポンプの歯車なんか一回転ごとにガリガリ言うようなケースが非常に多かつたのでありますが、歯車が悪くてガリガリ音がしておると、その流儀で機械が訴えておるのがわからんかと耳を引つ張られる。斎藤さんなんかも大いに引つ張られたのじやないかと思うのですがね。機械の方にくつつくほど耳を引つ張られて、機械の訴えをよく聞け、その当時はそういう表現で怒られる。今日だつたならばだいぶ問題になるでしようが、その当時工員、職工から係りの者の面前で、工場長格の者が耳を引つ張られるのですから、あまり格好はよくないわけです。そういうことはおかまいなしであつて、機械の悲鳴がなぜわからんかということをおやじがよく言いました。これはある一つの表現として言われて来たのだと私どもしばらくは解釈をしておりましたが、だんだん考えて見ると、これは機械のコンディションが悪いので、いやな音がするのは機械の訴えなんだということは、おやじの長年の経験から来た実感を率直についたものじやないかという感じが、

私は今日しておるのであります。

それでシビーヤな小言はしばしば食いましたが、それと同時にわれわれの言うことを理屈に合うものは決して取り上げないではない。しかしいろいろ試験をしたりなんかすることは、工場は研究所にあらずと言つて、よくお小言を食つたようであります。それと同時に、おやじの晩年にしばしば繰り返して私に述懐しておつたのは、おれは非常に仕合せな立場におる。毎日々々非常に貴重な教育を受けておる、ということは富士製紙にしても樺太工業にしても、あるいは鋼管会社としても、その全員の知能を傾けたいろいろなアイデアを稟議にして差し出す。そうしておやじの承認を経てそれが実施に移る。これにはその技術陣を総動員して知能を傾けた結晶をおれの前に持つて来る。それによつておれは始終教育されておるのだ、これは非常にありがたい立場で、それによつておれは啓発されるのだということをよく漏らしておりました。外見非常にやかましく、ワンマンの社長のように思えるのもやむを得ないような事態が多かつたのでありますが、そういつた一面もありました。

もう一つは、先ほど斎藤さんも言つておられましたが、社長に報告しなくちやいかんというようなことはありますが、工務の部長をやつておるというようなことから、工場の稟議やなんかをいろいろおやじにお取次をしてその決裁を受ける。ところが一方長谷川専務はなかなか非常に鋭い方で、この方は資金的に検討されて、案はよくてもそれをいかに安くやるかという面で検討されて、なかなかその実施がスムーズにいかんということもあつたのです。しかしある一つの工場でこういう実験をして、こういういいデータが出たというような報告がありますと、それを一応検討をして、これは大へん結構だからというので、すつかり書類を整えておやじの所に持つて参りまして、今度こういうことがあつて、これだけ歩留りがよくなつた、あるいはこういうことで作業改善ができたというような報告をしまして、数回私は怒られたことがある。それはおれに報告する前になぜそのデータを早速各工場に配らぬか、一つの工場でいいということが確かめられたならば、まずおれに報告する前に、各工場の同じような仕事をしておる所にそのデータを配付して、各工場の作業をインプルーブすべきじやないか。それを便々とおれに説明してからほかにそれを知らせるというような生ぬるいことでどうするかというような小言を言われる。それを再三ならず言われて、自分でもそれはごもつともだと思うのですが、手続上こつちの心がまえが至らないなめに、そういうような小言を再三受けて、それからだんだん上手になつて、一方工場に知らせるとともに、おやじにそのデータを持つて行くというようなことになりました。一面えらくむずかしいところもありましたが、その小言を言うにしてもいかにも急所をついた——おれにはわからんがお前考えろというような言い方でなくて

とにかくこうやつて見ろというような指示を出して、その結果を見て、自分でまたコントロールする。小言を言う以上はそのやり方について全部の責任を持つて、いい結果が出るまで探究する、従つてなかなかうまくいかん時にはまことにえらいので、これは先輩である高梨さんや下村さん、さんざん御苦労に相なつたことではないかと思うのであります。そういうような面もありましたことを、いろいろ話を承わりながら一言加えまして、お耳に入れておきたいと思いまして、いろいろおしやべりをいたしました次第で、お許しを願います。（拍手）

本文用紙は王子製紙工業株式会社の春日井印刷紙で大同洋紙店の御寄贈品であります、ここに厚く御礼申しあげます。

附二　桜影会第二回定時総会と桜塘翁を偲ぶ会（昭和三十四年六月七日）

総会挨拶

会長　池田新一

再建後第二回の総会を開催するに当り御挨拶申上げます。

本日は日曜日にも拘わらず遠路御参加を賜わり、又多数先輩に当る賛助会員の皆様にも御来会を頂き有難く深謝申上げます。又迫本名誉会員には御親族を代表されて御多用中御参会を頂き有難く御礼申上げます。年一回の総会には桜塘翁をしのぶ親睦の会ということで今後とも御参会願い度う存じます。

昨年度は敬慕会の開催、「桜影」の復刊の決定等をみました。御手許の「桜影」に会員の名簿を載せてありますので御覧頂き度う存じます。この間、全役員はすべて自己の犠牲において約十回の会合をもち、御協力を頂きましたことを厚く御礼申上げます。殊に本年は桜塘先生の生誕百年にも当りますので、更に団結の力を以て御恩にお酬いすると同時に、先生の各方面に残された大きな足跡や御人徳を顕彰する絶好の機会でありますので、一段と各位の御協力を御期待申上げる次第であります。

尚ほこれから定例によります第二回の総会に移りますが、その間賛助会員の皆様は会員とは申しながら実は皆先輩の方々でありますので、私共甚だ恐縮致しておる次第で御座いますが、暫らく御辛抱願つて私共後輩がどんな熱意を持つておるか、困つているのはどこか、今後どう支援したらよいかの御判断の資料として御覧頂き度いと存じます。

本会は直接利益を云々する会合ではありませんので、役員会にしても斯ういう集会などは兎角熱の冷めるのが自然の勢であるのに、毎回多数御熱心に御参加下さいますことは誠に感激に堪えません。之も各位の大川先生に対する敬慕の念のお厚い証拠であり、又陰から先生がお守護下さつている結果であると確く信ずるものであります。それにつけても本会を大川先生の御意志である、国を思い少しでも社会の為になるような会に発展させなければ申し訳ないと存ずる次第であります。この意味で歩一歩前進して行きたいと思います。どうぞ今後共一層の御援助を賜りますようお願いして挨拶を終ります。

懇親会

池田会長

只今理事会の互選の結果、引続いて会長をやれとのことですが、一番古い卒業生でかつ身近に居たからと云う、いわば卒業生の長老という意味で指名されたものと思います。幸いに副会長を始め理事各位が何れも有能かつ熱心な方々でありますので、行列の先頭の、いわばアクセサリーとして押してもらえると安心している訳であります。と申しますと、目の前におられる先輩各位からはお叱りをうけるかと思いますので、私も出来るだけ自力で歩きます。ついては桜塘先生が多年示された御抱負を傷つけないように、不案内な行先について手を引いて頂くことを先輩各位の御約束を頂戴して、この責任を御引受けすることにいたしたいと存じます。どうどよろしく。

迫本名誉会員

名誉会長の大川鉄雄氏が目下外遊中で出席出来ず、田辺さんも已むを得ない用事で出席出来ませんので、私が代表して出席いたしました。

育英会当時学生服であつた皆さんが、今は社会の各方面で活躍されて居られ、御多忙中を又折角の日曜日を割いて大川翁を慕つて御出席なされ、又賛助会員の皆様方も大川を忘れないで御出席頂きました事を衷心感謝いたします。翁も地下でさぞ皆様の御厚意を喜こんでいると思います。こういう関係で結ばれた皆さんが益々団結を固くし、相共に扶け合い、社会の為にお役に立つて頂くことを念願し、池田氏始め幹部の方に今後の事を宜しくお願いします。

大川翁には色々逸話もありますが、自分が直接触れた話をいたします。確か二回目の病気の時と思うが、床にねている時ドイツから手紙が来ました。病床につきそつていた自分に読めとのことで実は閉口したのですが、その時「困つた奴だな」と云つて御自分で取上げて大体の意味を読み下しました。試験があるから已むを得ず勉強すると云うような教育を経た自分達にくらべて、大川の場合はいつも必要があつて勉強したもので全然その気持が違つていました。すべてが仕事を自分のものとしてやる気持がないといけません。月給の為に働らくと云うようなことでは駄目だと考えさせられました。色々な思い出の中で特に自分が感じたことを申上げて御参考に供し挨拶に代えさせて頂きます。

木村　精氏

今日出席の皆さんの中では私が最長老のように見受けますので、一言大川先生の思い出を述べさせて頂きます。大川先

生の事業は製紙が主力だつたので、鉄の方は外様でした。私は大正六年から大川さんの関係会社である東海鉱業の社員として御厄介になつたが、確か入社三年目位経つた頃と思うが、ある時大川さんの室に行くと客と対談中でありました。突然部屋の隅に私を呼んで若年の私に質問されました。私は未だ浅い自分の知識ではあつたが、率直に申上げた処、大川さんは全くそのまま客に御自分の意見として話をされたのには驚きと共に感激しました。

其後私は東海鉱業の社長になつて部下を使う場合、この事を思い浮べ雑兵の意見でも何か得るものがあるものと考え、これを実行して来ました。お蔭で無事に社長の職責を果し得ました。之も偏えに先生のお蔭で、大川先生の御恩は忘れ難く、今後とも皆様と共に先生をしのびたいと思います。評議員はどう云うことをする役目か知りませんが、百年祭の時には是非お手伝いしたいと思います。

自己紹介終了後発言を求め

伊地知　剛氏（要旨）

桜影会を維持するには育英会を続けねばならぬ。終戦直後飯沼氏がやつていたが死亡して了つた。その後二名ばかりで調査をし、計算は出来ている。月に千円でも二千円でもよい、一人でも二人でもよい、続けていくべきだ。理事は埼銀の役員がなつていたが今は皆いなくなつた。理事長は仲々忙しいのでやれぬ。又埼銀に置くわけにもいかぬ。理事の一人二人を桜影会から入れ、事実上桜影会でやるより外ない。基金の残金に金を加えねばならぬが、大正十五年から昭和八年位迄が大部分のようであるから、そういう人の力により復活してもらいたい。すぐ初めていただき度い。

当時の残に加えて木村さんや相馬さんにも協力してもらい、是非復活したい。龍門社でも経営に困つているそうだが、龍門社は色々の人が入つている。桜影会は特殊の関係の人許りだから、子女の教育に困らぬようにすべきだ。

私も十年前に銀行をやめ、今はルンペンだがその時には老体に鞭打つてやる積りだ。

相馬　末吉氏

大川先生は父から二代の御縁であります。私も学生時分御指導を受け、卒業の時他の会社に就職を決めて、えらく叱られ、膝下に呼び戻されたような訳で、私は育英会の内容を詳しく知りません。併し大川さんは自ら貧乏から出られたことで、貧乏人の子弟の育英と云うことを痛感していられたのだろうと思います。大川育英会が鉄雄氏の時代に潰れて了うのは残念です。相当の金持は今からでも育英会をやろうとしています。中井商店の塩山社長などもその一人です。歴史のある大川育英会が立ち枯れとなるのは淋しい。鉄雄さんに話してもらつて何とか復活したいものです。育英会は大川さんの最も力を入れた事業でした。

育英会がなくなつては大川さんが忘れられることになるので、中絶するということが一番よくありません。

伊藤憲助氏（要旨）

百年祭は大川鉄雄氏が帰国する七月十五日迄に案を進めたい。高島菊次郎氏に話をしたら紙パルプ主催でやるべきだと云つた。大川さんと田辺さんが会長をしているので遠慮していると云つたら、そのような事は考える必要はないと申された。又育英会の話をしたら今まで知らなかつた、大川さんの大きな陰徳だと申された。百年祭の記念事業として育英会の再出発がその一つだと思う。百年祭は大川さんの関係事業に呼びかけてその総体でやるべきだと思う。桜影会、紙パルプ聯合会、埼玉県人会、日本金網、日本フエルト、浅野セメント、日本鋼管等、かくれているが、大川翁の企画が当つた事業は多い。種々の事情を考え慎重にやり度い。

伊地知剛氏（要旨）

大正年間に五十万の私財を投げ出したのは大したものだ。今なら少なくも三億五千万だ。私は千倍になつていると思う。運用は利息の三万円位で経営されていた。渋沢さんの私財が当時五百万円位と云われた。大川さんの私財でもこれ位のものであつたでしよう。大川さんは借金をして事業をしていたので、パニックの時はいかに苦労したかがわかる。育英会もあり余つた金を出したのではない。本当に精神的な御決意でやられたものだ。考えると涙が出るくらいだ。

会長

育英会は私共にとつては、いわば母校のようなもので、その消長については重大な関心事でありますことは勿論でありますが、それについて名誉会長からも段々のお話もあり、又御都合もありましようと存じますので、押付けがましい意見になりましては申訳がないと存じ、一切差控えておつた様な次第であります。

只今お聞きの様に一般会員の中からも亦先輩の賛助会員からも桜影会の前途、従つて育英会の将来について烈々たる御意見を拝聴いたしまして、洵に有難い極みであります。殊に育英会発起の頭初から関与せられた伊知地さんから、育英会は先生の有り余る金からではなく、ひたすら先生の人生観と愛郷の至誠から出されたものであつたことを承わり、改めて感慨を深くする次第であります。

つきましては甚はだ御迷惑かも知れませんが、本日御出席の伊知地さん、相馬さん、木村さん、伊藤さんなどの先輩を総会の総意として御推薦申上げ、鉄雄さんが御帰朝の上御懇談願う事に決定いたしたいと存じます。（満場拍手）

有難う御座います。尚ほこれをお願いいたしますについては私共は飽迄お手伝い申上げると云う趣旨でおりますことをお忘れなくお含み置き下さるようお願い申上げます。

遺　影　　昭和四年十月　古稀記念　和田三造画伯制作

『桜の影』刊行のことば

桜塘は大川翁の雅号である。これはおそらく住みなれた向島から絵のような春の墨堤を望んで共感された心の象徴であつたと思う。

明治・大正・昭和にかけて日本経済の勃興期に、産業界の騎士として、独歩の地位をきずいた颯爽たる舞台姿は、すでに当代の人のよく知るところ、まさに堤上の桜花に比すべきであろう。

歴史は夜作られるとか、燃ゆる憂国の至誠を内につつんで、人間味豊かなかずかずの楽屋生活のあつたことは当然のこととは申しながら、翁独特の持ち味と大胆さは、まさに名優の名にそむかぬものがあり、この楽屋こそ絢爛たる桜花を培う堤ではあるまいか。

志在四海　而尚恭倹　心包宇宙　而無驕盈

の銘と思いあわせてうなずかれる。

やがて萌えいずる若桜を心にえがかれた育英会も、翁の堤にいだかれた香り高い芸術の一つであつた。戦災の嵐に打ちたおされた若桜は、桜影会の名のもとに、慈父を慕つていまこの堤の上に立ちあがろうとしている。花は根にかえり、真味は堤にとどまつているであろう。

翁の趣味芸道はその数かならずしも多いとはいえないが、その理解の深さ広さは他の追随をゆるさぬものがあり、ことにみずから手がけられた趣味にはトコトンまで徹してやまない信条と、古い型を破つて自分の個性を傍若無人に発揮されたところに、翁の真面目があつたようだ。事業と同様これらの趣味芸道もすべて一つの理想に結びつけられていたのではあるまいか。それは

一点真心　萬変不窮

の銘が静かに説明している。

当時根津・大川が宴会の両雄であつたとの某料亭の述懐も、飲めない翁の酔人ぶりがしのばれて面白い、が、

これとても不得手を超えて編みだされた翁の芸であり、粋人といわれたゆえんであろう。

春回雨点溪声裡　人酔桜花萬緑中

哥沢は四十余年の芸歴をもつと、翁生前の口癖だつた。けだし得意中の得意……至芸であつたようだが、いまその名調子を伝えるすべのないのがいかにも残念である。愛誦の二句を添えてわずかにその余韻をしのぶよすがとする。

ここに集めた遺墨は、功なり名とげた晩年の作が多い。画上翁みずからかたる……書画ともに無師の芸……と。されどその雅趣深々、書は画となり、絵は語りまた唄う。墨人一如、翁の三昧境、いまにみる心地がする。

なお左腕の健筆は翁のもつとも快心の技であつたようだ。翁は酒と同様生来の左ききではない。少時、王子製紙の図工たりしとき、苦心訓練のたまものという。書画もとより絶妙なれども、無言の教示その墨底に秘せられあるを感ずる。

ことに翁の絶筆とおもわれる湯河原名勝見附松の賛にいたつては、自己の非力をかたる素直さ、他日ふたたびそれに挑まんとする喜寿翁の闘志と気魄、将た何をかいわんやである。

有志秘蔵の割愛をえてここに集載し、『桜の影』と題して諸賢の座右におくる。数ある翁の伝記の姉妹として各位の懐旧に資するところあらば編者の幸いこれに過ぎるものはない。

明治八年ヨリ同二十二年ニ至ル二十四年間ハ大川兄弟ガ奮闘努力ノ期間ナリ　回顧スレバ其始兄弟受ル処ノ俸給僅ニ兄ハ五円弟ハ三円五十銭ナリキ　母ガ手製ノ襦袢ニ三尺帯ヲ締メ草履下駄（靴ヲ購ウ資力ヲ欠ク）ニテ午前六時前ヨリ夜十時後迄工場内ニ活動シ聊モ倦怠疲労ノ状ヲ示サズ　蓋シ出世栄達唯一ノ途ハ他人追随ヲ容サザル誠意ト努力ヲ提シ長上ヲ敬服セシメ同僚ヲシテ批判ノ余地無カラシムルニ在ルヲ悟レルガ為メナリ　兄弟ノ今日ノ事ハ偶然ニ非ス　其源ハ此大覚悟ニアリ

昭和六年新春　　桜塘述懐漫画

（池田氏蔵）

明治八年ヨリ以三十二年ニ至ル
二十四年間ハ大小ヲ外ガ為閑ガ
ガ、明治ヲ明治ニ入レバ其故ヲ
受ケ、後ノ俗称使ヒ、之ハ五四ノ三四
五十歳ヲ過キ母ガ手裏ノ神ニ三
尺帯ヲ締メ草履下駄ノ靴ヲ履ク
生活ヲ知ラ、ニ午前六時前
ヨリ夜十時後ニ工場内ノ作業ヲ
聊ニ僅ニ疲ニ心ノ快ヲ求ム
蓋世界ニ唯一、遠ク他人
ノ迷惑ヲ考ヘル誠ニ多カ
ラ殺シ長上ノ教授ヒヲ以テ
シテ批判ノ徐地世ヲカラレサル
ヲ恨シルカ為メニ先ヲ今日ノ事ハ
偶然ニ出ズ其源ハ此大異恨ニアリ

昭和六年白春
柳原
吉徐画

戒慎乎其所不睹
恐懼乎其所不聞

大正戊午初夏　桜塘逸人

（田幡氏蔵）

時々反己世間無可怨之人
事々問心腹中無難言之事

（下村氏蔵）

戒慎乎其所不睹
恐懼乎其所不聞

大正戊午初夏　揖斐逸人

時々反己世間萬事可懇之人
事々問心腹中萬雖言之事

唐下村記二君　大川平三郎書

志在四海而尚恭倹
心包宇宙而無驕盈

大石詞兄清鑑　桜　塘

（大石氏蔵）

天道積聚衆精以為光
聖人積聚衆善以為光

桜塘消閑一戯

（下村氏蔵）

志在四海而尚恭儉
心包宇宙而無驕奢

大石翁先生法鑒　楊博

天道稽聚衆精以為光
聖人積聚衆善以為功

楊博清國一銭

隱逸林中無栄辱
道義路上無炎涼

桜塘閑人戯試両腕

（田幡氏蔵）

静中看得天機妙
閑裡廻観世路難

桜塘老生
試雙腕

（製紙博物館蔵）

隨遇安中樂居易
道義到上書本意

[illegible]

靜中看得天機妙
閑里[illegible]世韻長

[illegible]先生
[illegible]

春回雨点
溪声之裡

絵にかけば
手付きおかしき
ひだりきき

昭和辛未新春
湯河原静遊

人酔桜花
竹影中

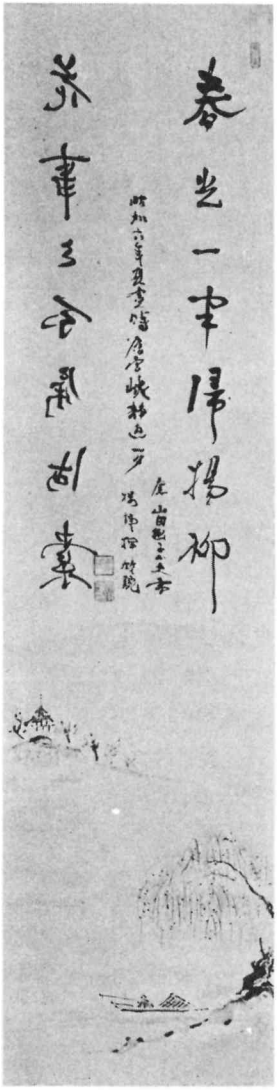
床上桜塘
得意満面
頻揮雙腕

（田幡氏蔵）

春光一半帰楊柳
花事三分属海棠

昭和六年夏尽時
層雲峡静遊一夕

応山田敏子女子需
桜塘揮雙腕



柔克制

剛之図

昭和十年晩秋於
宜蘭客舎
桜塘消閑一戯

児童巧ニ大水牛ヲ
使役スル有様ヲ写シ
床上困臥ノ理作先
生ヲ慰ント欲ス

（大川理作氏蔵）

（絵）

松築山

昭和七年十月
白川温泉

（田幡氏蔵）

米英
制圧
之夢
昭和十年收穫祭
宮崎県産業
横山隆一

昭和七年十月
白川陸軍特別登
横山隆一画

武次夫婦

天麩羅喰ニ

出掛ル体

昭和九年五月　日　桜塘写（田辺氏蔵）

（小軸）

四海生春風

昭和九年十一月一日桜塘（田辺氏蔵）

田辺兄妹弟三人

昭和十年十月十三日写

修一　十一歳

妙子　九歳

健雄　八歳

於　滝野川中里本邸

午時　桜塘　七十六歳齢

此日桜塘心気爽快偶々孫児

三人来訪皆強健学業成績亦

頗ル良好戯写其形容

四海生春風
四海生春風
昭和九年一月書

（色紙）

若非似水
清無底
争得如水
凛払人　桜塘

（山内幾馬氏蔵）

（色紙）

志在四海而尚
恭倹
心包宇宙而無
驕盈

（池田氏蔵）

志在四海而尚
恭儉
心包宇宙而世
鷗夏

楊慎

若非似水
清澈底
爭得如水
凜冰人

楊慎

下村氏宛書簡

謹啓　過日中は御上京の処万事欠礼勝に相成候事御寛恕可被下候

偖池上秀畝画伯今回樺太漫遊を思立たれ大泊、豊原、真岡位は是非御一週被成候筈に存じ、真岡へ御出相成候はゝ御宿泊所其他万事十分に御世話申上候様御願致候製紙工場もまだ始めての事ならんと拝察し候間十分御了解被成候迄懇切の御説明可被成候

拙生の大胆なる計画に成れる手井の人造湖も御覧を乞ふへしに候（融雪の湯水を集め置き之を利用し無水の真岡に水が元なる製紙業を始めたることを克く御話可被成候）

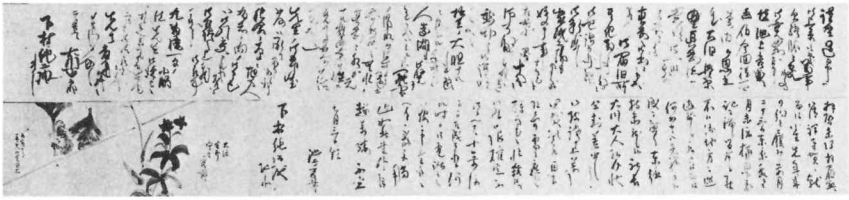
先生の御希望如何は承り不申候得とも紀念の為に地方人有志の間の御申込は御引受あるや否も御相談の上可然御取計可被下候

丸菊楼一夕の小酌位先生御嫌ひに無之候はゝ御案内方可然御取計可被成候

先は当用如此に御座候　　匆々

花器　（池田氏蔵）

花器　湯河原名勝為池田子　（池田氏蔵）



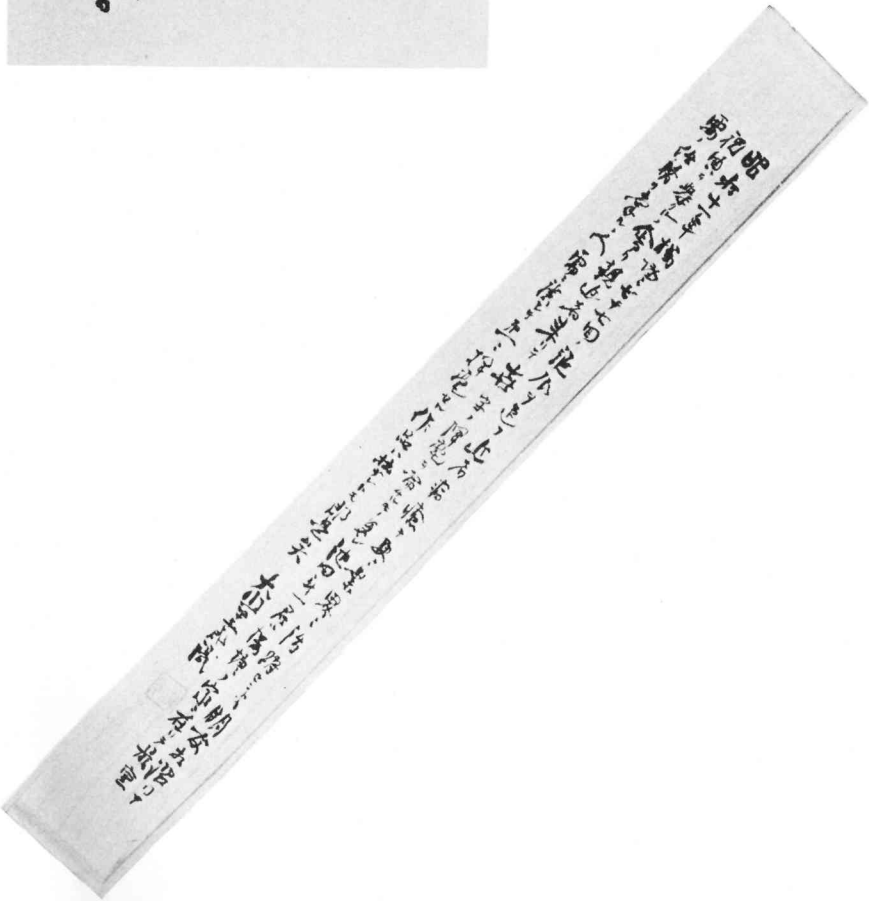
喜

昭和十一年七月七日
七七翁大川平三郎書
（池田氏蔵）

箱書（昭和十一年十月）　（池田氏蔵）

昭和十一年桜塘七十七回ノ証辰ヲ迎フ
近者病癒テ更ニ業界ニ活躍セントス
明友相諮リテ祝典ヲ挙クルノ企アリ
親近者来リテ喜字ノ揮毫ヲ需ムルモノ多シ
池田新一君ハ桜塘ノ家ニ在リテ最重要ノ任
務ヲ掌ルノ人
需ニ応シテ第一ニ揮毫セル作品ハ拙ナレト
モ即是矣

昭和十一年七月七日
七十翁 大川平三郎書



哥海

「薄墨ふこのく玉章も思ひしを百峰つつる雪暮る日うぐのふるこで明しさんふ[illegible]の世を思ふ所を墨さんおもひ所ちしてまなるぬはやく若衆をなをうしく

「元と意ハ時の帰さを日を来法以法しの志ち む絲弱ち法で孫をやち 姫多ままらや男なるを むなづしやおなを吉ちハ きうしれあいかくとまを なねどくをしくと思和 形ちくのなをしく形る 主以形

桜塘漫画

（浅井氏蔵）

桜塘子生レテ画ヲ習ハズ　而モ時ニ触レ興ニ乗シテ珍画ヲ物スルコトアリ　其作品後日見テ頗ル興味アルヲ感スルモノ無キニアラズ　片々之ヲ屑籠ニ投スルニ忍ビスト家人此画帳ヲ製ス　子之ヲ受ケテ喜フ処児童ガ玩具ヲ得タルノ状ニ類セン呵々

横博漫画

横博ヲ生テ画ノ習ハズ而モ
時ニ偶レ興ニ乗ジテ珍画ヲ物
スルヲアリ其作品頗ル見
テ味ハヒ興味アルノ感スルモノ少キニ
アラズ特ニ之ヲ展覧ニ投スル
ニ足ルベシト雖ドモ画帖ヲ装
スルニ之ヲ見テ素ヲ変更ス
既ニ博氏ニ代ハリ漫画

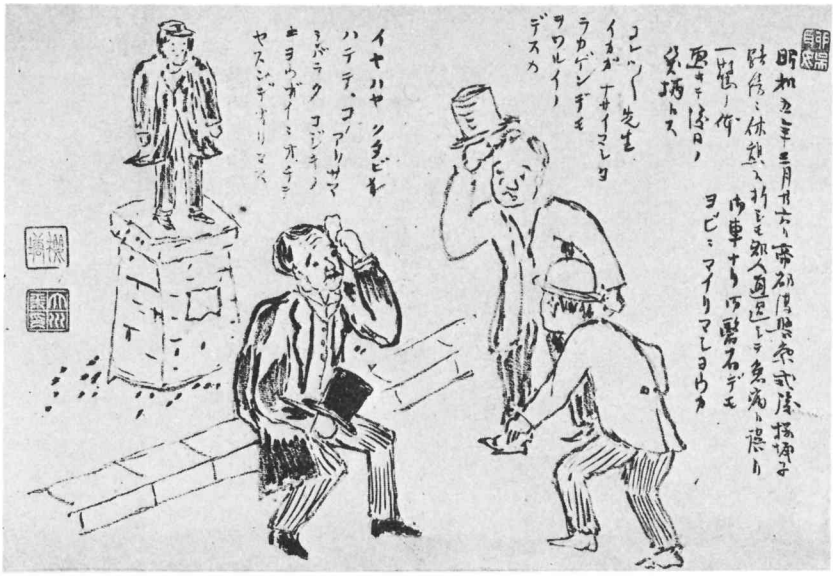
①

昭和五年三月二十六日帝都復興祭式後桜塘子路傍ニ休憩ス　折シモ知人通過シテ急病ト誤リ一驚ノ体画キテ後日ノ笑柄トス

②

湯河原静遊記念

昭和六年一月四日湯河原大倉公園ニ散策ヲ試ム　園中小亭アリ　絶壁ノ下渓流騰奔風光佳絶閑寂意ニ適ス　直ニ筆ヲ採テ之ヲ画ク　随行者田鉄氏案内者ニ帰路ヲ問フ　朝居女史頻々奔流ヲ愛瞰ス　漫然烟ヲ喫スルハ予ナリ


明治五年三月廿六日帝都傳聞新武陸橋ヲ
試傳ニ休憩ス打ヒ来ル人夫ニ「ヒ名高ク聞ク
一覧ノ代
西洋ヨリ渡日ノ
米国人ス
内車ヨリ降リ
ヨビニ
コレハ〜先生
イヌガ ナサイマレヨ
ラクデンヂモ
ヨワルイノ
デスカ
イヤハヤ ケタビキ
ハテテ、コノアリサマ
ヨバラク コジキノ
ヨウガイニ オチテ
ヤスンデオリマス

明治六年一月吹
湯の原久倉の図
湯の原
久倉

春回雨点溪声之裡

昭和辛未新春
湯河原静遊中
桜塘
頻揮雙腕
得意満面
之図
絵にかけば
手つき
おかしや
ひだりきき

人酔桜花
竹影中

（田幡氏蔵）

③

昭和五年ハ桜塘子最悪戦苦闘裡ニ経過セリ
歳晩聊疲労ヲ感シタルヲ以テ生来始メテノ静
養ヲ湯河原天野屋ニ試ム　六年一月四日函嶺
湯滝ノ温泉地ヲ踏査ス　山ノ中腹ノ架橋破損
シテ危険状態ニアリ　桜塘子平然トシテ先ツ
渡ル　田鉄氏橋ノ央ニ倒レ漸クシテ墜落ヲ免
カル　田鉄氏元来粗忽ノ人ナリ　斯ル事件ハ
其例頗ル多シ　敢テ奇トスルニ足ラスト雖記
念トシテ之ヲ漫画トス　他日之ヲ繙ク時当時
ノ情況ヲ偲フニ足ラン歟

春回雨題漢詩
明和辛未春
勝川保孝題
桜塚
野坪笠助
得恵陽氏
之間

④

昭和六年四月四日　湯河原桜山ニ登ル　桜塘

老ヒタリト雖健脚　田鉄氏老ヘスト雖及バズ

婦女ノ援助ヲ求ム　田幡氏曰ク桜花爛熟汗グ

クダク

⑤

昭和六年四月十九日湯河原広河原仙花園ニ遊

ブ　溪流狂奔幽静賞スベシ田鉄氏千代女ヲ伴

フ　途上小橋ヲ架ス　園主小野加助一人ニテ

架セルモノ　田鉄氏千代女ヲ抱擁セルノ図ヲ

写ス

⑥

昭和辛未仲夏於湯河原客舎　桜塘戯画

岩村峻君ハ義太夫狂ナリ　場所ヲ撰マス時ヲ嫌ハズ特ニ黄金ヲ散スルヲ意トセス　友人皆評ス此人ニシテ此病無クンバ少クモ富豪番付ノ幕ノ内ニ入ル資格アリ惜ムベシト　君ノ真意ハ大ニ異レリ　黄金何物ソ　紙治酒屋梅忠ノ如キ其　処ニ至リ嬌音一番聴衆ヲシテ夢ニ入ラシム　就中幾多ノ美形秋波ヲ送ル　此間ノ愉快彼等俗徒ノ味フコトヲ得サル処乃公独之ヲ占ム　是豈人生ノ真味ヲ解スルモノト云フベキニアラズヤ　是ソ君ノ徹底セル悟道ナラン

予ハ君ニ忠言ヲ呈シテ曰ク人間ハ年ト共ニ老ユ　若キ間ニ盛ニ歌イ頻々友人ヲ苦シメ歌ツテ歌ツテ歌イ通スベシト

⑦

桜塘子田鉄子犬殺ノ図ヲ製ス　田鉄子傍ニアリテ喜色満面ノ状是ナリ　而シテ両子ノ顔面ハ朝居女史ノ作ニシテ以下ハ桜塘子之ヲ画ク評者皆曰ク両子ノ客体頗ル酷似スト　桜塘子素ヨリ甚不服不満ナリ　閑ニ乗シテ事由ヲ附記シ他日ノ参考トス

田鉄秘書滑稽洒落ノ人ナリ　好ンテ滑脱ノ舞踊ヲ演ス　就中犬殺ヲ舞フ時其技真ニ迫リ観客ヲ笑殺セントス　拍手拍手再演又再演　秘書愛敬満面得意又満面稚気愛スベシ　戯レニ冷評ヲ加フル者アリ　曰ク是舞踊ノ巧ナルニアラズ　秘書ノ風格自然ニ犬殺ニ適スルガ故ナルニ過キズト　聴者皆大笑ス　記念トシテ桜塘消閑ノ余技ヲ揮フ

昭和八年四月秋湯河原客偶、

前山満目桜花爛熳之光景

春回雨点溪声裡、人酔桜花万緑中

⑨

桜塘子頻対画帳不得画是有苦心之状

朝居女史在傍而不顧之耽華道研究之図

⑩

夏山雨漸霽

擺擺子類打盹怕不得盹無有
苦心之狀朝斥如史在傳而
不厭之歌華道不完之篇

夏山
雨霽
楊傳
誠作

⑪

昭和十一年新春桜塘養病在湯河原夜来降雪
天地白皚々静寂不堪閑頻戯執筆製之

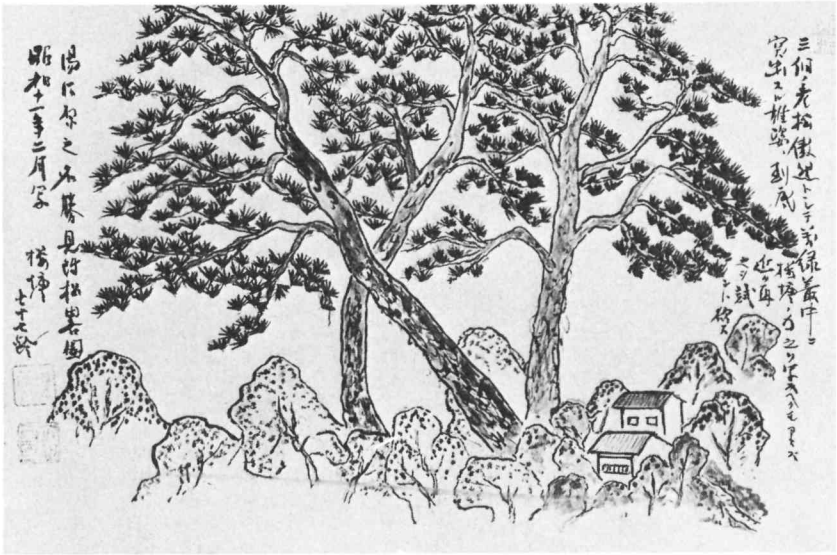
独寝の淋しさにあん燈引よせのむたばこ、
枕にあてし文のはし、
かへすかへすも深酒と浮気の出ぬようと、
書きたる人はよその花、
それに迷うたが馬鹿らしい。

⑫

湯河原之名勝見附松略図

昭和十一年二月写
桜塘七十七齢

三個ノ老松傲然トシテ万緑叢中ニ突出スル雄
姿到底桜塘ノ力之ヲ写スヘクモアラズ近ク再
之ヲ試ント欲ス



編集後記

大川平三郎翁生誕百年祭記念として、翁の制作された書画を蒐めて「桜の影」を刊行することになって、昨年十二月六日に開催した大川先生二十三回忌記念敬慕会に、来賓及び会員の持参展示された掛軸類を写真撮影しておいたものに、画帖や掛軸、天然色印画等を追加撮影して編集致しました。翁の面影を偲ばしめる原色版は、和田三造画伯の油絵をゴム印画法によって複製された珍らしい天然色写真を原稿として製版印刷したもので、原画のもつ油絵の階調を充分に表現することが出来なかったのではないかと思われます。翁の作品は、外見では極めて翁が器用であられたことを示しているが、その内側に蔵するものは翁のお人柄を良く物語っていて、今更に我々をして追慕せしめるものがあると信じます。淡彩を施した小軸や画帖の階調をあらわす為に、印刷はコロタイプ法を採用しました。これは通常多く使用される網版よりも微細な文字や調子の損われることを防ぐ点にも意味があります。収載された書画の類はそれぞれ大小があり、画帖以外は不揃いでしたが、編集の都合上或る程度整頓せざるを得なかったのであります。又編集に着手してから約一カ月の期間で仕上げたので、文中多少の誤りなきを保証し得ないと思います。この点は予じめ御了承を願いたいと思います。巻頭の「桜の影」刊行のことばにあるように、翁の伝記の姉妹編として、末永く保存されますよう念願して止みません。なお写真撮影のために貴重な御所蔵品を貸与された各位に対し厚く感謝申し上げる次第です。

「大川先生生誕百年祭記念誌」

昭和五十八年十一月三日　発行

発行人　池田　新一

発行所　桜影会

〒108
東京都港区海岸三―五―一〇
東京倉庫運輸㈱内
電話〇三（四五三）八二六一番